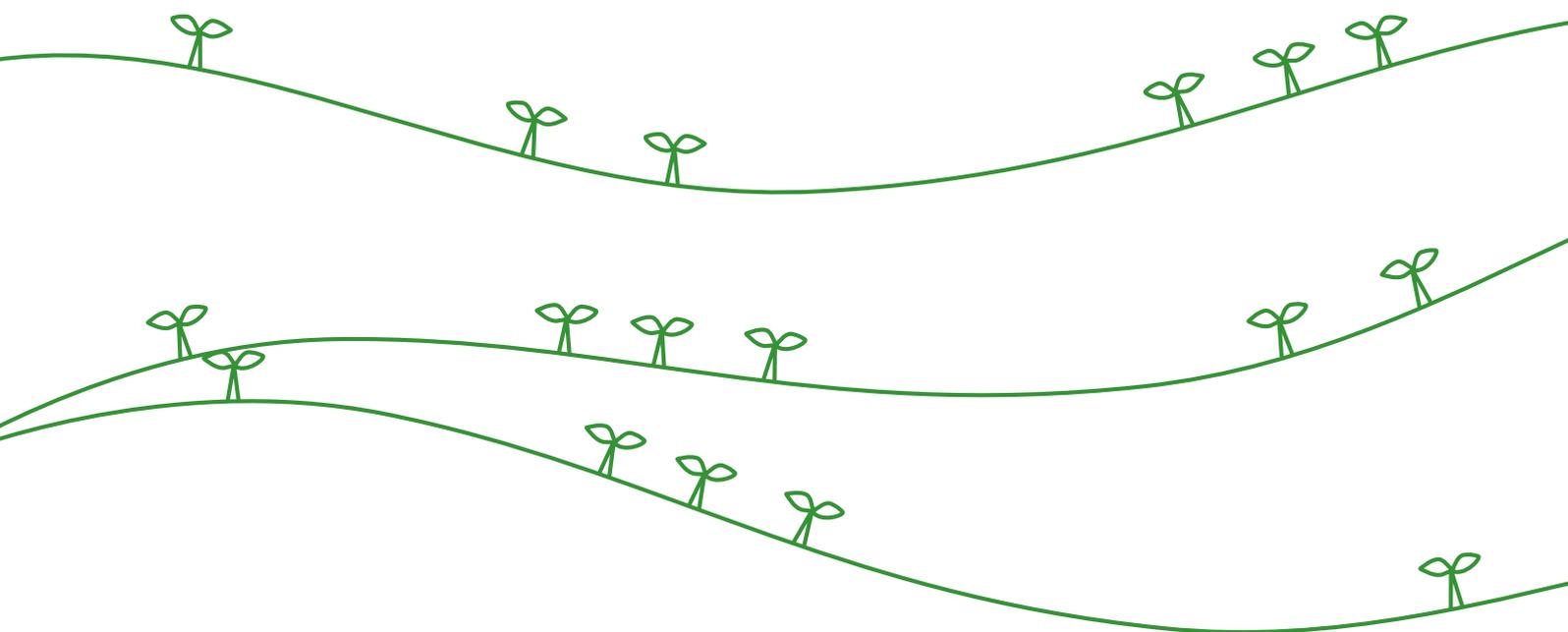


medical corporation
MINKODO
1962-2012

50
years

医療法人 泯江堂 創立50周年記念誌



医療機関に求められるもの

- 受診し易い環境づくり
- 常日頃から地域の皆さんと交流する開かれた病院づくり
- 病気に対する正しい知識を知って頂く機会を増やす
- 地域の皆さんのメンタルヘルスを守る者としての存在を自覚する

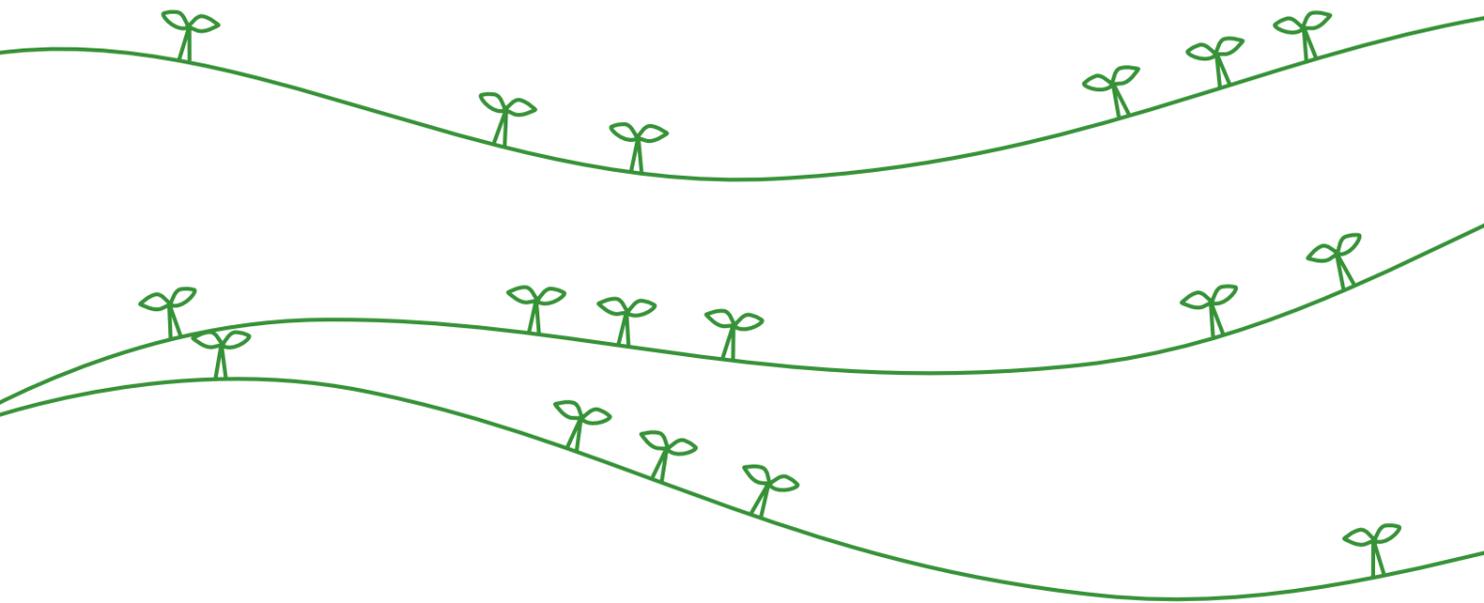
Minkod Aburayama Hospital

BRANDING PROJECT

KAIRIKAI



**医療法人 湊江堂
創立50周年記念誌**





医療法人浜江堂
理事長
三野原 義光

創立50周年を迎えて

医療法人浜江堂は2012年3月20日に創立50周年を迎えました。

これもひとえに、利用者の皆様方、地域の皆様方、法人にかかわっていただいた関係機関およびご指導いただいた先生方、そしてご協力会社の皆様方のご支援によるものと、法人を代表して厚く御礼申し上げます。

同時に、懸命に今日の礎を築いてくれた祖父母や両親、献身的に医療・介護に携わった多くの職員にも、この場を借りて深く感謝の意を表したいと思います。

この50年は、家庭的で温かい入院施設としての精神科病院のあり方を大切にしながらも、あらゆる先進的な精神科医療・介護に挑戦し続けた激動の歲月でした。それは、現在50歳を迎えた私の人生とも重なり、大変感慨深く思う次第です。

さて、私たちを取り巻く環境、特に現在の厚生行政はかつて類を見ないほどの大変革期にあります。少子高齢社会を背景に、増大する社会保障費の財源をいかに確保するかが、この国の未来を左右するまでになってまいりました。

その流れはもちろん精神科病院や老健施設においても例外ではありません。まさに昨今の診療報酬・介護報酬同時改定は、わが国の精神科医療や高齢者医療・介護はいかにあるべきか、という国家戦略が明確に打ち出されたものになっていると感じます。

これからの精神科医療は、病棟の機能分化の進展を受けて、今後は「在宅」と「急性期」という二つの極を持つ、患者さんや利用者の皆様方の「サービスの自己決定」を重視した地域包括ケアに変貌していくに違いありません。高齢者医療・介護についても一層の「在宅」強化と地域連携が求められるの言うまでもありません。

そのなかで私たちは、チームとしてただ利用者ニーズをいち早く読み取り、安心と安全を生むサービスを、一体感をもって提供していきけるか。今、その真価が問われています。

「出会いのたね 信頼の根っこ 安心の森」

私たちは21世紀のあるべき精神科医療・介護の理想をこのスローガンに託して、今後も利用者の方々に寄り添い、「安心の森」を提供できるように努力していくことをここに改めて誓います。

浜江堂の「安心の森」は、 人と人との 「出会い」と「信頼」で 育まれています。

1749(寛延2)年、

初代文菴が糟屋郡篠栗村に診療所を開いてから260年あまり、

地域医療へのさらなる理想を求める浜江堂は1962年、

福岡市に油山病院を核とする医療法人浜江堂を開設。

さまざまに変革を重ねながら2012年に創立50周年を迎えた。

浜江堂はこの半世紀をひとつの節目に、

さらに、新しい精神科医療・高齢者介護に挑もうとしている。

自分たちの医療・介護を選んでくれる利用者に向か提供できるのか、

何をなすべきかを見つめ直し、スタッフ全員で新たな取り組みを始めたのだ。

それは「出会い」というたねを大切にまき、

「信頼」の根を張る木を育て「安心の森」として安らぎの場をいっしょに。

これからの精神科医療・高齢者介護のあり方をこの浜江堂から発信したいと思っている。

C O N T E N T S

経営理念	6
ブランディング	8
マスタープラン	10
<hr/>	
浜江堂の歴史	12
誕生から半世紀	15
この10年の取り組み	28
<ul style="list-style-type: none"> ・チーム医療の新たな取り組み ・精神科急性期治療病棟の運営 ・精神科リハビリテーションとEBP(科学的根拠に基づく実践プログラム) ・診療の最前線で ・高齢者のための医療・介護の出会い ・介護老人保健施設からざステーション設立15周年を迎えて ・臨床現場を支えて ・魅力ある人材育成をめざして ・地域とともに 	30 40 48 64 78 82 106 110 124
<hr/>	
未来への展望	126
<ul style="list-style-type: none"> ・展望 — これからの地域精神科医療と浜江堂の進む道 — ・地域包括ケアの拠点としての介護老人保健施設からざステーション ・活力あふれるスタッフ 	128 130 132
<hr/>	
三野原 義光の50年	141
<hr/>	
寄稿 黎明期から草創期へ	148
<hr/>	
Message 浜江堂とともに	152
<hr/>	
資料編	155
「以和為貴」	174
あとがき	



3つの約束

利用者への約束

浜江堂は、利用者に安心かつ安全なサービスを提供し、職員はその実現のために「自己研鑽」に努めます

- 安心** | 常に利用者のニーズを先読みし、利用者中心のサービスを提供します。
- 安全** | 常に基本を忘れずに、利用者の安全に細心の注意をはらいます。
- 自己研鑽** | 医療水準の向上とホスピタリティの向上のために研鑽を怠りません。

地域への約束

浜江堂は、地域社会との調和を重視し、「こころの健康」を支えます

- 調和** | 地域との共存共栄を図り、住民の方々とのコミュニケーションに努めます。
- 開放化** | 地域のメンタルヘルスの拠点として、開かれた施設をめざします。
- 啓蒙運動** | 全ての職員は「こころの健康」のための啓蒙運動を実践します。

職員への約束

浜江堂は、可能なかぎり職員が安心して働ける環境を整備し、生活の向上に努めます

- 労働環境** | 快適で動きやすい職場づくりのために法人と職員はともに努力します。
- 生活環境** | 仕事と生活の最良のバランスを生み出すために法人は努力します。
- 自己実現** | 法人は可能な限り職員の自己実現をサポートし、職員は人格の向上に努めます。

経営方針

浜江堂は上記の項目を実現するために常に目標を掲げ、合理的経営を実行します

- 目標設定** | 常に目標を掲げ、計画的な部門運営に努めます。
- 永続的發展** | 全ての職員は浜江堂の永続的發展のために努力します。
- 合理的経営** | エビデンスに基づく運営を心がけ、合理的経営を実行します。

医療法人浜江堂 経営理念

基本理念

浜江堂は、受け継がれた伝統のもと、「和」と「活力」と「信念」を以って業務に当たります

和

私たちは
ひとつのチームです。
常に語り合い、
助け合いましょう。

活力

互いに切磋琢磨し、
魅力ある人間を
めざすこと。
そこから活力が
生まれます。

信念

常に理想を追う
信念こそが
私たちの未来を
つくります。

浜江堂のブランディング・コンセプトは、経営理念に基づいてすべてが構築されており、その理念を全員で共有することで組織の価値を最大限に高めることを目的としています。さらにこのコンセプトを内外に積極的に伝えることで、他の病院や施設との違いを利用者の方々に認識していただき、安心感をもたらすことに力を注いでいます。「出会いのたね 信頼の根っこ 安心の森」これが私たち浜江堂のブランディング・コンセプトです。

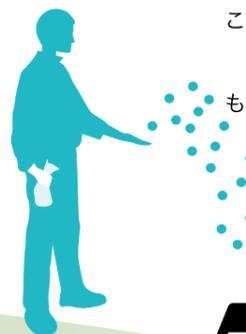


2009 出会いのたねまき

第1期

ブランディング・イメージを利用者、ご家族、関係者の方々、地域の方々、そして私たち自身に定着させるための第一歩です。この年は、外来・入院でかかわった方々のみならず、法人の敷地内に訪れていただいたすべての方々との出会いを大切に、その出会いのたねを大地にまく季節といえます。

まずは「あいさつ」「笑顔」「あたたかさ」。当たり前のことを当たり前できるように今一度ふりかえることが利用者や関係者の方々との信頼をはぐくむ第一歩です。あの人があるとほっとする、癒される、そんな存在に一步でも近づけるよう全員が努力する一年として位置づけます。



医療法人浜江堂のブランディング

BRANDING STORY

medical corporation
MINKODO
1962-2012
5 years



2010 信頼の根っこ

第2期

たねはまいただけでは芽を出しません。豊かな大地にまかれてこそ、たねは芽を出します。この年は、ブランディング定着化の2年目。職員の真の力量が試される時期です。自らを磨き、次に利用者から「浜江堂だから」「浜江堂こそ」という評価をいただくために、法人は管理監督者、一般職員の資質の向上のための研修や支援を積極的に展開し、そして職員個人も自己研鑽のために努力する一年としたいと思います。信頼のないところには何も生まれません。しかし、信頼が根底にあれば、そこにはどのような困難が待ち受けていたとしても、きっと乗り越えられるでしょう。

それは利用者やご家族との関係、職員の間関係、法人と職員の関係にしても同じことがいえるでしょう。

2011 安心の森

第3期

いよいよ法人のイメージを完成させる年となります。緑豊かな油山の麓にある医療法人浜江堂が患者さんや利用者にとって唯一無二の「安心の森」となるために。これまで積み上げた管理監督者、職員個人の資質とともに、私たちの力を最大限に活かすためのシステムづくりを完成させる年となります。システムを単に導入するためではなく、ここに集う人たちの雰囲気やこれまで培われた組織の風土を最大限に伸ばすためにどのようなシステムを構築すればよいのか…見本はありません。私たち自身で前人未到の大地を開拓する気概で翌年の50周年の記念事業を迎えたいと思います。



2012 創立50周年～そして未来へ

第4期

創立50周年のこの年、浜江堂は新たな病院の姿を模索するために未知の航海に旅立ちます。しかし、それは無謀な冒険ではなく、これまで培われた管理監督者の力量、職員の力量、組織の力量が蓄えられたからこそこの挑戦といえましょう。この年の記念事業として、私たちは新しい精神科リハビリテーションを軸とした、これまでにない医療の姿を50周年記念事業「病棟新築・改修計画」のなかで実現いたします。より身近でより利用しやすい精神科病院へ。私たち医療法人浜江堂は、縁あってここに集う人々すべてが癒される環境づくりのために、2012年を次の60周年に向けた新たなスタートの年として位置づけます。



2013年3月▶11月

第1期工事

- 東館の解体(第1回)
- 新東館の新築(メンタルヘルスセンター機能の移転)
- メンタルヘルスセンターの改修(職員更衣室等の移転)
- 東館解体(第2回)
- 文化財調査(2013年12月～2014年3月)



2013年4月▶2015年2月

第2期工事

- 北館別館(80床/1階20床 2階30床 3階30床)の新築
- 北館別館新築に伴う南館48床ならびに中館32床の全面移転



2015年3月▶6月

第3期工事

- 南館48床移転に伴う内科療養病棟の増築
- 中館の4床室化と個室の増設工事
- 医療相談室・コピー室の移転、跡地に売店を新設移転、テラスの設置



第3期工事完成時 七田池から見た油山病院

2020年▶2025年

60周年記念事業

- 外来・管理棟の全面新築
- 内科療養病棟の全面新築
- デイケア、リハビリテーション機能の移転



医療法人浜江堂のマスタープラン

MASTER PLAN 2013-2025



医療法人浜江堂のマスタープラン

医療法人浜江堂は、これまで施設の新築・増改築を重ねることで法人のさらなる飛躍のきっかけをつかんでまいりました。

- 当時の精神科の最新鋭の概念が投影された中館90床の新築(1976年、創立15周年記念事業)
- 民間では福岡市内初のデイケア施設の創設(1987年、創立25周年記念事業)
- 精神科リハビリテーションを推進するメンタルヘルス・センターの新設(1995年)
- 認知症対応型の老人保健施設からぎステーションの開設(1997年)
- 北館〈精神科急性期治療病棟40床・精神科療養病棟60床〉の新築(2003年、創立40周年記念事業)

これらの事業が一体となり、現在の浜江堂の多彩な治療プログラムによる早期回復、在宅精神科医療による社会復帰を可能にしております。

そして今回、50周年記念事業として、下記の3つが行われることが決定いたしました。

- 1) 新東館増設工事・・・2013年3月～11月
- 2) 北館別館(80床)増築工事・・・2013年4月～2015年2月
- 3) 内科・中館改修工事・・・2015年3月～6月

1)～3)の工期は事前調査も含めると約2年6カ月にも及び、このような長期にわたる工事は50年の歴史の中でも初めてのことで。

浜江堂にとって、新体制のもとでの施設の新築は悲願でもありました。

これまで旗艦として位置づけられた北館(100床。2003年竣工)は、個室率60%のプライバシー重視の病棟として、利用者や各界から高い評価を受けておりました。

しかしその後、急性期治療病棟のノウハウが確立していなかったこともあり、急激な病床回転率の上昇による病床利用率の低下に直面します。

また、旧病棟との療養環境の違いはあまりにも大きく、北館から既存病棟に移ることをためらう利用者も少なくありませんでした。

このような状況を打破するために、2007年に就任した新理事長のもとで実現可能な病棟新築計画を模索し、ついに2012年8月に上述の3施設の増設・改修工事の基本図面が完成します。

浜江堂では、60周年記念事業としての外来・管理棟ならびに内科療養病棟の整備を実施することで、既存病棟の建て替えを全て完了する予定です。

浜江堂はこれからも利用者のニーズや厚生行政の方向性に合致した最善の療養環境を提供するために努力いたします。

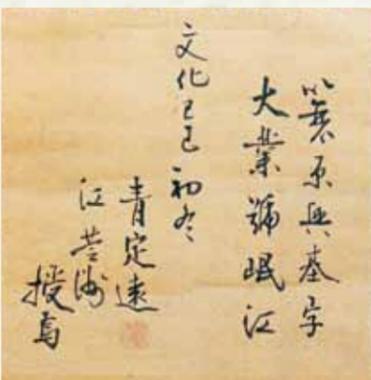
浜江堂の歴史

浜江堂の歴史はわが国の西洋医学の黎明期とも重なる。江戸時代半ば、篠栗の地に三野原文菴が医業を開業して以来、今日まで260有余年続くその歴史をひも解き、受け継がれる医療理念を探る。

1723(享保8)年、浜江堂の元祖文菴は長崎街道の筑前六宿のひとつ嘉穂郡内野宿の次右衛門夫妻の嫡男として生まれ、のちに糟屋郡篠栗村の真宗本願寺派龍江山妙福寺(開元1521年)の息女と婚姻し、1749(寛延2)年3月15日、25歳で同村において開業いたしました。

開院にあたり、文菴は中国の詩人杜甫(712年~770年)の漢詩「麗成」から2字をとり、屋号を浜江堂と決めました。当時は紀州徳川家の9代将軍家重侯の治世で、筑前福岡は6代藩主黒田継高侯が藩主として享保の大飢饉後の窮民対策や藩政改革に当たられた時代でした。博多でも享保の大飢饉では、行き倒れ、間引きが後を絶たない惨状で、2万を極めた人口は1万3千人に激減していました。

その頃、福岡藩の西洋医学は、地理的な優位性から、長崎出島のオランダ商館医師などからの最新情報を得ることができました。福岡藩医6代原三信が日本最初の西洋解剖書の翻訳本とされる杉田玄白・前野良沢らの「解体新書」(1774年刊)



【上】甘棠館教授江上苔洲が文亮に書き与えた賛 【下】四代文亮興基

に先立つこと87年前に和訳人体解剖図を完成させるなど、蘭学導入の先進の地であったと言えます。また、我が国においても1754(宝暦4)年に京都の山脇東洋が初の人体解剖を実施するなど、西洋医学の黎明期であり、そのような時代背景のもとで文菴も開業いたしました。その後2代元澄(1756年~1807年)、3代春菴(1775年~1821年)が医業を継承し、4代文亮の時代となります。

4代文亮興基(1793年~1848年、字は大業)は文武に優れ、35歳にして篠栗の居宅を再建。春菴から家督相続後、1831(天保2)年11月39歳の折、博多一の産科医として名高い宮本立生師より産科奥術免許を皆伝されます。その頃の産科は外科でもあり、三野原家にも文亮の朱書きのメモが克明に記された人体解剖図が遺され、当時の医学者の地道な努力を垣間見ることが出来ます。

この文亮の時代には、医学と儒学が密接に結びついており、「儒医」という言葉が存在していました。その当時の交流を裏付けるかのように、江上苔洲、原古処、吉留渉、廣瀬

淡窓、草場佩川、亀井陽州、亀井少菜など、西学問所甘棠館館長であった亀井南冥の学灯を受け継ぐ江戸後期の儒者や書家の遺墨・写本などが三野原家にも遺されています。

文亮が師より免許皆伝を許されたのち、文亮の嫡男文明(1802年~1844年)も同じく外科を志し、1804(文化元)年に世界初の全身麻酔手術に成功した華岡青洲の門下となることを決意し、紀州若山(現在の和歌山県)へと向かいます。青洲の開設した医学校「春林軒」には最先端の医学を学ぼうと全国から千人の門下生がひしめき合っていました。当時の文明の講義帳からは新しい知識を得る日々の喜びが伝わってくるようです。文明は与えられた最新の情報を手に郷土の医療のために尽くすことを夢見ておりましたが、将来を嘱望されながらも賜チフスに倒れ、1844(天保15)年9月24日に23歳という若さで客死し、和歌山県の浄土宗合念寺に葬られ、遺髪と講義帳のみが郷里へと届けられました。

このできごとは文亮にとつて大きな心労でしたが、奇しくもその翌年の1845(弘化2)年3月3日、11代藩主黒田長薄侯にその力量を認められ、御目見を仰せつけられます。

死の直前に記された遺言には、「御礼式、冥加のほどありがたく、ご国恩に対して長く奉公と思いが、生者必滅は世の習い」「出殿する際に帯刀したこの脇差を決して惜しむわけではないが、年始挨拶などの特別の日に使用していた



文明が使用したとされる日本地図

もの、今後も御目見の用途に」と述べており、黒田侯の謁見を大変名誉に感じていたことが伺われます。1848(嘉永元)年6月25日、文亮は年来の持病であった心筋梗塞によってその生涯を閉じました。文亮は幸いにも男児に恵まれており、15歳より遊学していた実子玄昇一徳(1825年~1882年)が浜江堂を継承しました。

5代玄昇も先代の教えを守り、刻苦勉勵ののち、父と同じく、1866(慶応2)年に黒田長薄侯に御目見を仰せつけられます。

玄昇の子の玄衆が父を偲ぶために作らせた掛軸には、父自詠の詩として、「浮世は逆旅と知り、功名また何をか求めん。(略)一杯かつ悠々」とあり、かねてより仏教心篤かりしことを思わせ、生前の玄昇の人格がうかがえます。

1882(明治15)年8月3日、玄昇が没すると、6代玄衆満直(1852年~1914年)が三野原家を継承。この時すでに廃藩置県により藩医制度は廃止され、福岡県知事より「内科外科医」の医師免許を授与されました。郡会議員一期。特に書に秀で、諸町にその遺墨が存します。

1914(大正3)年、玄衆没。7代大次郎後継。1872(明治5)年に福岡藩の医学校養生館が廃校されたことから、九州帝国大学医学部の前身である京都帝国大学福岡医科大学を修了。その人柄は温厚にして寡黙。妙福寺檀徒総代、篠栗村村会議員などを務めました。1932(昭和7)年8月には医院と居宅を新築。大東亜戦争中には医師応召のため町内唯一の医師となり、過労と胃癌にて1949(昭和24)年2月11日に死去。大次郎の次男満直は南方の激戦地であったニューギニアアーク島



五代玄昇一徳

※1/文菴の開院年月日については1735(享保20)年としてClinic magazine 第197号30p.に「全国病院開設の歴史」として紹介されていますが、ここでは4代文亮が1848(嘉永元)年戊申5月に編纂した三野原家過去記録を基にしています。また、文亮編集のこの過去記録を、1887(明治20)年10月19日に6代満直が政府に届け出しています。ちなみに、全国病院開設の歴史順位は、同誌によると①七山病院(大阪府泉南郡) 1599(慶長4)年 ②原三信病院(福岡県福岡市) 1600(慶長5)年 ③玄々堂病院(佐賀県鳥栖市) 1675(延宝3)年 ④浜江堂三野原病院(福岡県糟屋郡) 1735(享保20)年 ⑤猫山宮尾病院(新潟県新潟市) 1751(宝暦元)年 などとなっています。



導水瑣言附録など医学書の写し(三野原家蔵)

Episode

History of MINKODO

誕生から半世紀。

medical corporation
MINKODO
1962-2012

50 years

1962年、エネルギー革命をきっかけに日本がまさに高度経済成長の波に乗ったころ福岡市早良区野芥に、医療法人涓江堂が誕生した。それから半世紀。精神科医療・高齢者介護は劇的に進歩したが、世の中の変化、国の政策などにたびたび翻弄もされてきた。その足跡は時代を映す鏡といえるかもしれない。



六代玄衆満直

956(昭和31)年に三野原医院を拡充。1962(昭和37)年3月には長男和光(現医療法人涓江堂会長)が、古賀胃腸病院院長古賀得四郎の私塾「晩翠寮」の同級生であった岩崎光次(元福岡家庭裁判所所長)の次女和子と結婚しました。その直後の1962(昭和37)年3月20日、敏治は当時の1950年代から続く国家的な精神科病院開設の機運を読みとり、西油山を後方に臨む豊かな自然の下、福岡市早良区野芥の地に医療法人涓江堂油山病院を開設し、初代理事長・院長に就任しました。当時の許可病床数は80床。非常に牧歌的な雰囲気な

9代敏治は1910(明治43)年3月20日生。1934(昭和9)年3月に九州医学専門学校現久留米大学医学部卒業。その後九州帝国大学医学部小児科学教室、三井鉱山山野鉱業所病院、九州帝国大学細菌学教室を経て1941(昭和16)年8月に陸軍軍医中尉として応召されました。1945(昭和20)年8月の終戦直後にはソ連ウスベック共和国に4年間も抑留され、都合9年間も戦地・外地での過酷な生活を余儀なくされます。復員後は愛一郎より涓江堂を継承し、1

にて1944(昭和19)年29歳で惜しくも戦死しています。
8代愛四郎は大次郎没後、医業を継承。愛四郎は1913(大正2)年、九州において初の結核療養所を津屋崎に開設。津屋崎療養院と命名。また、篠栗付近に点在していた一族の墓を1932(昭和7)年8月に合葬再建。のちに宗像郡医師会長、久留米大学理事なども務めました。



七代大次郎

Episode History of MINKODO

涓江堂の歴史 1723-1950

- 1723(享保 8)年 嘉穂郡内野宿の次右衛門夫妻の嫡子として文菴誕生
- 1749(寛延 2)年 3月15日、糟屋郡篠栗村にて文菴開業。涓江堂を屋号とする。
- 1791(寛政 3)年 始祖文菴没 二代元澄後継
- 1807(文化 4)年 二代元澄没 三代春菴後継
- 1821(文政 4)年 三代春菴没 四代文亮興基後継
- 1831(天保 2)年 文亮、博多一の産科医宮本立生師より産科奥術免許皆伝
- 1844(天保15)年 文亮の嫡男文明、華岡青洲門下で頭角を現すも夭死す
- 1845(弘化 2)年 3月3日、文亮、黒田侯にその力量を認められ藩医として登城
- 1848(嘉永元)年 文亮没 五代玄昇一徳後継
- 1866(慶応 2)年 10月、五代玄昇一徳、黒田侯にお目見仰せ付けられ登城
- 1882(明治15)年 玄昇没 六代玄衆満直後継
- 1914(大正 3)年 玄衆没 七代大次郎後継
- 1949(昭和24)年 大次郎没 八代愛四郎後継
- 1950(昭和25)年 九代敏治涓江堂を継承す

か、患者さんや職員が分け隔てなくともに生活していたといえます。
敏治は油山病院を開設後、1966(昭和41)年に三野原病院改築のために土蔵を解体。三野原家累代墓所を1984(昭和59)年に長男和光、次男厚とともに再建。
院外では、浄土真宗本願寺派参与、同衆会議員を歴任。糟屋郡医師会議長、福岡県私設病院協会常任理事、糟屋郡自由民主党支部長、喜多流謡教授、舞鶴ライオンズクラブ会長を務め、1965(昭和40)年には紺綬褒章を受章しました。1990(平成2)年11月18日80歳で死去。
妻は4代文亮の実父藤茂平の曾孫藤藤十郎(元県会議員)の三女フミ子。次男厚は三野原病院理事長・院長、長女陽子は医療法人涓江堂理事。
初代理事長の掲げた「和顔愛語」の精神は現在も経営理念のひとつ「和」として脈々と受け継がれています。



八代愛四郎

医療法人 浜江堂 歴代理事長



初代理事長
三野原 敏治
[1962年～1988年]



二代理事長
三野原 和光
[1988年～2007年]



三代理事長
三野原 義光
[2007年～現在]

油山病院 歴代院長



初代・五代院長
末安 三義
[1962年～1965年][1972年～1976年]



二代院長
粕屋 和男
[1965年～1968年]



三代院長
良永 春樹
[1968年～1969年]



四代・六代院長
三野原 敏治
[1969年～1972年][1976年～1985年]



七代院長
鈴木 高秋
[1985年～2002年]



八代院長
三野原 義光
[2002年～現在]

介護老人保健施設からごステーション 歴代施設長



初代施設長
伊藤 敏明
[1997年～2004年]



二代施設長
中川 信行
[2004年～2005年]



三代施設長
中村 美幸
[2005年]



四代施設長
藤井 眞一
[2005年～現在]

医療法人 浜江堂 初代理事長 敏治は1962年に油山病院経営理念を「和」と定め、開設直後から仏教の慈愛の精神を基盤とした病院運営に乗り出しました。病院の開設当初より長男和光は専務理事兼事務長として経営全般を受け持ち、栄養士として働く妻和子とともに患者さんが一人もいない80床の病棟のベッドを埋めるべく東奔西走することになります。

1966年、油山病院を187床に増床。新館落成式典を挙行した頃には患者さんも増え、経営はようやく軌道に乗り始めました。この頃和光は、油山病院の進むべき方向性へのヒントを得るために世界の精神科病院視察団に参加。1カ月をかけてユーラシア大陸を一周しています。

公私ともに病院創立からの繁忙期を脱しつつあった1967年6月には、ようやく職員住宅が完成し、和光と和子も入居することになりました。また1970年8月には4階建ての職員住宅を建設し、福利厚生面がさらに充実しました。

1976年5月、和光は副理事長に就任。同年、これまで病院の中庭だった場所にエアシユーターや中2階のナースステーションなど、当時の最新の概念を反映した病棟90床を新築します（創立15周年記念事業）。

その後も増床が続けられ、1980年7月に内科45床、精神科238床、計283床の現在の形となりました。

～「和」「活力」そして「信念」～

引き継がれる 創始者の こころ

medical corporation
MINKODO
1962-2012



左から三野原和光会長（当時副理事長）、故三野原敏治会長（当時理事長）、鈴木名誉院長（当時院長）、中川先生（当時副院長）

この年、職員のための湯布院保養所やまなみ荘が完成。今でこそ湯布院は観光地として有名ですが、当時はひなびた温泉街で、片道4時間もかかっていました。現在は高速で1時間程度、東急湯布高原別荘地でも当法人は屈指の利用率といわれています。

1985年以降は主に和光が診療機能の充実に力を入れた時代です。

1985年5月には麻生飯塚病院の副院長を長年務め勇退された鈴木高秋氏を院長に、さらに1988年7月には元国立中央病院精神科部長の安陪光正氏を副院長に迎えるなど、精神科病院としての機能が飛躍的に向上するきっかけができました。

この頃は特に福岡大学精神医学教室の協力病院として、WHO委員を務め世界的に著名であった西園昌久教授（現名誉教授）のご指導のもと、大学病院における治療概念を積極的に吸収した時代でもありました。和光は世界精神分析学会等にも4度同行し、精神医学最先端の情報を得ることに努めました。また、同教室助教であった牛島定信氏（現東京慈恵医科大学名誉教授）に非常勤として病棟スーパーバイザーを務めていただくことで、看護スタッフの多様な精神疾患への対応能力も格段に向上しました。

これらの流れを受けて和光は入院医療から回復期・慢性期のリハビリテーション医療へとその視野を広げ、1987年2月に精神科作業療法承認。同年6月には福岡市内で民間では初の精神科デイケアの

認可を受けます(創立25周年記念事業)。その意味でこの年は浜江堂の社会復帰プログラム元年といえるでしょう。

1988年12月、和光は敏治から理事長職を受け継ぎ、第二代理事長に就任。就任とともに、新経営理念を発表します。そこには、①良質の医療と合理的経営の実践 ②地域社会との連携 ③「和」と「活力」による患者さん中心の医療の実現 ④自己研鑽、の4項目が提示され、以来「和」と「活力」が浜江堂の合言葉として広く使われるようになります。

1992年11月の30周年記念式典事業をはさみ、作業療法の実現するため1995年6月にメンタルヘルスセンターを新築。多彩なプログラムによる作業療法活動の推進と「喫茶オレンジ」の設置による社会復帰活動を開始します。同時にセンター食堂、センター厨房の設置による食事環境の改善を行い、リハビリテーションの充実を図るとともに、患者さんの生活の質の改善に寄与しました。

1997年には浜江堂の方向性を大きく変えるできごとが起こりました。老人保健施設からぎんステーションの開設です。当時、多くの老人保健施設でその疾病に伴う周辺症状のために行き場を失いつつあった認知症患者の方々に、精神科病院との連携による安心で快適な療養環境を提供すべく、和光は介護保険事業への進出を決断します。ベッド数は80。建設開始時に建築予定地に「野芥遺跡」が出土し、1万6000年前の石器が発見されるなど予期せぬ



北館内覧会の日、来客と談笑する三野原和子理事。
左端は三野原和光会長

003年10月にやっと落成の運びとなり(精神科急性期治療病棟40床・精神療養病棟60床)、内覧会が実施されました(創立40周年記念事業)。
同年3月に和光によって発表され、40周年記念誌にも収録された「浜江堂中期計画」は、現在も形を変えずつ新しい50周年以降の計画に大きな影響を及ぼしています。

2004年3月、医

療の特殊性を踏まえた広報活動と当法人に関わるあらゆる人々のコミュニケーションを促進することを目的にみんこう堂コミュニケーションセンターを開設。この試みは当時では珍しく、朝日新聞の全国誌欄で紹介されました。

翌年の2005年5月、老朽化が課題であった油山病院外来棟の全面改装工事が完工し、外来患者さんの治療環境を大幅に改善することができました。常々70歳引退説を唱え後進に早く道を譲ることで浜江堂の将来をさらに盤石のものにする、として数年前より準備を進めていた和光は、2007年3月理事長退任を決断。

病院幹部を前に語る
故三野原敏治会長



medical corporation
MINKODO
1962-2012



忘年会で職員を前に心を入れて語る
三野原和光会長(当時理事長)



病院幹部とともに米国病院視察。前列右から
2人目が三野原和光会長(当時理事長)

きごとにも遭遇しながら、ようやく11月に施設をオープン。その後はまだ現在のように認知症患者に対するの医療・介護の研究が進んでいないなか、パイオニアとして様々な現場の苦労がありました。現在では認知症患者のリハビリテーション施設として市内の医療機関でも高い評価を受けています。

また、同年9月には浜江堂にとってもうひとつの大きなターニングポイントとなるできごとがありました。訪問看護ステーションあいりすの併設です。福岡市内では初の精神科訪問看護ステーションとして生まれ、以来今日までの15年間、経験や事例の積み重ねによって、現在ではより一層高いレベルでの精神科アウトリーチを実現しています。また、介護保険における居宅介護支援事業所ケアセンターのぞみの開設(1999年)、グループホームサンライズ荘(精神障害者を対象とする共同生活援助事業)などの開設が続き、医療保険や介護保険下における精神科や高齢者のための退院後の受け皿づくり、地域包括ケアの進展に力を注ぎました。

1999年にいよいよ和光の長男である三野原義光が医師として着任。老朽化が目立つ病棟の新築と病棟機能分化における急性期治療病棟の承認を得ることをめざして「2002年委員会」を設置し、委員長に就任。2001年には既存病棟を一部改修して38床の急性期治療病棟の届出をなし、2002年には義光院長が誕生しました。

2002年10月に北館100床が着工され、2003年4月、第三代理事長三野原義光、副理事長三野原信二、専務理事三野原一徳、の新三役体制が築きました。

その翌年に義光は、これまでの「和」「活力」に「信念」を加えて新経営理念とし、この理念のもと「3つの約束(利用者、地域、職員への約束)」と「経営方針」を定め、「理念の見える化」と普及に力を注ぎます。

また、経営理念の発表と同時に、3年後に迎える50周年を「未来の精神科のあり方を広く内外に発信するスタートの年」と位置づけ、3年間それぞれの年にテーマ性を持たせることで、「理念の共有」のための「理念の見える化」を図りました。

この3カ年計画を浜江堂では「ブランディング・コンセプト」と名づけ、

1年目 第一章「出会いのたね」(原点復帰)
2年目 第二章「信頼の根っこ」(自己研鑽)
3年目 第三章「安心の森」(環境整備)

と、それぞれのストーリーに沿った課題に全職員が何らかの形で取り組むことで「傑出した組織価値」を生み出すことに専念してきました。

利用者の方々、そのご家族、地域の皆様方、浜江堂を支える関係者の方々とその職員の全てが憩える場に一步でも近づきたい――

浜江堂はこれからも日々の自己研鑽を通じて最善の医療・介護を提供し、利用者やご家族のより良き伴走者として、「安心の森」実現のために努力を重ねていくことを誓います。



医療法人浜江堂 専務理事
三野原 一徳



医療法人浜江堂 副理事長
三野原 信二

副理事長、法人本部長
として法人全体の経営
全般に関わっている

介護老人保健施設から
ステーション副施設長を
兼務。法人内のネットワ
ークの責任者でもある



1



5



4



2



7



6



3



10



9



8



13



12



11

1 1966年当時の病院本館 2 1966年当時の中庭 3 特別室 4 脳波検査室
5 臨床検査室 6 外来診療室 7 1967年当時の職員寮 8 当時の野外バザー
9 1970~80年頃、グラウンド（現在の中庭）で盆踊りをする患者さんと職員。
後方に見えるのは、現在のサンライズ荘。1970年当時は職員アパートだった
10 1976年9月に落成した1病棟、最新鋭の設備を備えていた 11 当時の運動会の様子
12 1979年頃の病院入口付近はまだ住宅もなかった。右は北看護部長
13 1975年頃、病棟での集合写真

【昭和37年~昭和56年】

1962-1981

理想の医療を求めた 黎明期

1964年の東京オリンピック開催を挟み、日本が奇跡といわれる経済成長を実現した時代。高速道路や新幹線などのインフラが整備され、家庭には三種の神器といわれる家電品や自家用車が急速に普及していった。しかし一方で学生運動の激化や環境破壊、公害問題が深刻化。1973年のオイルショックでインフレが加速されると人々は自己保身に走り、高度経済成長は終焉を迎えることとなった。

年月	医療法人 浜江堂の歴史	社会の動き
1962年(昭和37年) 3月	・医療法人設立認可、油山病院開設認可(精神科病床80床、理事長 三野原敏治) ・保険医療機関指定 ・初代院長 末安三義就任 ・生活保護法指定医療機関認可	・東京都の人口が1千万人を突破 ・マリリン・モンローの急死 ・堀江謙一が小型ヨットで太平洋単独横断に成功 ・富士ゼロックスが国産第1号の複写機を完成
1963年(昭和38年) 9月	・精神衛生法指定承認(50床)	・ケネディ米大統領がダラスで暗殺される
1965年(昭和40年) 1月	・精神科39床増床、計119床となる	・プロ野球のドフト制スタート
1965年(昭和40年) 3月	・二代院長 粕屋和男就任	・日韓条約諸協定調印、日韓関係がようやく正常化
1966年(昭和41年) 6月	・精神科68床増床、計187床となる。	・全日空727型機羽田空港沖墜落 ・ビートルズが来日
1968年(昭和43年) 4月	・三代院長 良永春樹就任	・3億円強奪事件発生
1969年(昭和44年) 3月	・内科7床、精神科1床増床、計195床となる	・東大安田講堂で学生と機動隊が衝突 ・米宇宙船「アポロ11号」が人類初の月面着陸 ・家庭用ビデオデッキ登場
1969年(昭和44年) 7月	・四代院長 三野原敏治就任	・大阪で日本万国博覧会開催
1970年(昭和45年) 6月	・精神科12床増床、(内科28床、精神科200床、計228床) ・職員住宅4階建て建設 役員住宅建設	・日航機「よび号」乗っ取り事件が発生
1972年(昭和47年) 3月	・創立10周年記念誌「浜江堂250年史」発刊	・浅間山荘事件発生 ・沖縄が日本に返還される
1972年(昭和47年) 4月	・五代院長 末安三義就任	・ロッキード事件発生 ・中国の毛沢東主席が死去
1976年(昭和51年) 5月	・副理事長 三野原和光就任	・王選手が756号ホームランを達成、世界新記録を樹立
1976年(昭和51年) 9月	・六代院長 三野原敏治就任	・日本赤軍が日航機ハリエをハイジャック
1977年(昭和52年) 4月	・1病棟落成(90床)	・新東京国際空港(成田空港)が開港
1977年(昭和52年) 6月	・創立15周年記念・新築落成記念式典	・衆参同時選挙中に大平首相が急死、自民党の圧勝となる
1978年(昭和53年) 1月	・内科45床、精神科200床、計245床	・山口百恵引退
1980年(昭和55年) 7月	・内科45床、精神科238床、計283床となり現在に至る ・湯布院保養所やまなみ荘落成 ・コンピューター(シンシメルコム80)導入	

1982-1991

質の向上に力を注いだ 発展期

1980年代前半低成長だった日本経済は、1985年の「プラザ合意」によって円高が急速に進行すると、不況回避のための低金利政策が不動産や株式への投機を促進し、未曾有の好景気「バブル景気」へ突入していく。1988年には一大贈賄事件「リクルート事件」が政界を揺るがした。世界的にはベルリンの壁崩壊やソ連の消滅など、第2次世界大戦後にはじまった東西冷戦が幕を閉じることとなった。



1 1984年3月、西消防署との消火・避難・救出合同演習。中央本部席は故三野原敏治初代理事長。その後は三野原和光会長（当時副理事長） 2 1985年7月の消火・避難訓練 3 1988年6月、福岡市消防学校で開催された第3回早良区自衛消防隊屋内消火栓操作法大会。油山病院は、女子3人操法の部優勝、男子3人操法の部準優勝の成績を収めた 4 1984年5月、第1回 野外食。中央のcock姿は三野原和光会長（当時副理事長） 5 1984年4月、患者さん参加の料理教室を開催。中央の白衣の女性は栄養指導する三野原和子理事（当時栄養部長）。30名ほどの参加で季節料理を作った 6 1984年8月の納涼盆踊り大会 7 1985年10月、第23回油山病院秋季大運動会 8 1987年9月、油山病院創立25周年記念祝賀会 9 理学療法室（1990年頃） 10 放射線室（1990年頃）

年月

医療法人浜江堂の歴史

社会の動き

年月	医療法人浜江堂の歴史	社会の動き
1985年（昭和60年）5月	・七代院長鈴木高秋就任	・日航ジャンボ機が群馬県御巢鷹山に墜落
1986年（昭和61年）8月	・作業療法棟デイケア棟改築	・男女雇用機会均等法施行
1986年（昭和61年）9月	・西本館、外来部門改築	・ソ連でチェルノブイリ原発事故発生
1987年（昭和62年）2月	・精神科作業療法承認	・NTT株買い上げ騒ぎ
1987年（昭和62年）4月	・給食業務委託を開始	・南氷洋での商業捕鯨に幕が下りる
1987年（昭和62年）6月	・精神科デイケア承認	・国鉄分割民営化でJRがスタート
1987年（昭和62年）7月	・自衛消防隊屋内消火栓操作法大会で優勝	・NHKが衛星テレビ放送開始
1987年（昭和62年）9月	・デイケア及び作業療法棟披露、創立25周年記念式典	
1987年（昭和62年）11月	・院内学習会発足、学習委員会を結成	
1988年（昭和63年）2月	・厨房改築	・青函トンネルが開業
1988年（昭和63年）3月	・患者家族会（あけぼの会）設立	・贈賄事件「リクルート疑惑」が発覚
1988年（昭和63年）12月	・三野原敏治 会長就任、三野原和光 理事長就任	・福岡ダイエーホークス誕生
1989年（平成元年）1月	・福岡県精神病院協会創立35周年記念表彰を受ける	・天皇陛下崩御。年号「平成」となる
1989年（平成元年）11月	・三野原和光 理事長、経営理念を掲げる	・リクルート事件で江副前会長を逮捕
1989年（平成元年）11月	・内科45床、1病棟90床、2病棟60床、3病棟88床、合計283床となる	・消費税スタート
1989年（平成元年）11月	・院長鈴木高秋、精神保健功労者厚生大臣表彰を受ける	・中国で天安門事件起こる
1990年（平成2年）4月	・2病棟及びデイルーム改築	・ドイツでベルリンの壁崩壊
1990年（平成2年）6月	・3病棟医師看護者のカルテ共有開始、友和の集い始まる	・千代の富士が史上初の通算1千勝を達成
1990年（平成2年）8月	・季刊誌「油山」創刊（年4回発行）	・礼宮さま、紀子さまご成婚
1990年（平成2年）8月	・会長三野原敏治 死去	・東西ドイツ統一
1991年（平成3年）1月	・医療廃棄物容器の新設	・TBSの秋山記者が日本人初の宇宙飛行に成功
1991年（平成3年）1月	・新コンピュータ（富士通HOPE3060）の導入	・湾岸戦争が勃発
1991年（平成3年）2月	・職員食堂「オレンジ」開店	・雲仙・普賢岳で火砕流が発生
1991年（平成3年）8月		・ソ連邦が消滅し、ゴルバチョフ大統領が辞任

1992-2001

先見的取り組みに挑んだ 転換期

バブル経済が破綻し、株価と不動産価格が暴落、金融機関の破綻や企業の倒産が相次ぐ。就職氷河期で派遣労働者が増加し、ニートと呼ばれる若者が登場、さらに中高年のリストラも増大。また1995年に阪神大震災、オウム真理教による一連の事件が起こるなど社会不安が日本を覆った。世界ではIT化とインターネットが爆発的に普及し、ネット社会に突入した。

medical corporation
MINKODO
1962-2012

- 1 1992年10月、第30回油山病院秋季大運動会
- 2 1992年11月、油山病院創立30周年記念式典
- 3 1994年頃の油山病院総務事務所内
- 4 米国病院視察研修（1994年11月～12月）
- 5 1997年10月、老人保健施設からさステーション開設
- 6 浴室
- 7 機能訓練室
- 8 療養室（個室）
- 9 デイケア室
- 10 1997年、訪問看護ステーションあいらず開設
- 11 1997年頃の油山病院施設全景
- 12 周辺に住宅が増えて来た1999年頃、病院の入口より野芥団地をバックにして。右が北看護部長
- 13 1999年頃の油山病院正面玄関



年月

医療法人浜江堂の歴史

社会の動き

年月	医療法人浜江堂の歴史	社会の動き
1992年（平成4年）3月	中央浴場改築 創立30周年記念式典及び記念誌発行	毛利衛さんがスペースシャトル「エンデバー」で宇宙飛行に成功 月1回の学校5日制スタート
1994年（平成6年）8月	特例許可老人病院入院医療管理（1）届出受理される 薬剤管理指導（薬）第89号届出受理される	向井千秋さんが宇宙へ プレイステーション発売
1995年（平成7年）6月	メンタルヘルスセンター新築	地下鉄サリン事件発生
1996年（平成8年）8月	院内感染防止対策（感防）243号届出受理される 老人保健施設着工	大阪府堺市で病原性大腸菌O157による 学童集団食中毒事故が発生
1997年（平成9年）10月	老人保健施設からさステーション開設 訪問看護ステーションあいらず開設	消費税率5%にアップ ダイアナ元英皇太子妃交通事故死
1998年（平成10年）5月	法人本部棟（旧管理棟）を含む各病棟の増改築工事着工	特定非営利活動促進法案（NPO法案）が成立
1999年（平成11年）6月	法人本部棟に図書室を設置 精神科デイナイトケア ナイトケアを開始 在宅介護支援事業所 ケアセンターのぞみ開設 療養型病床群設置に伴う本館1、2階改装工事着工	欧州で単一通貨（ユーロ）導入 茨城県東海村の民間ウラン加工施設（JCO）で 国内初の臨界事故発生、死者を出す 福岡ダイエーホークス初優勝
2000年（平成12年）3月	第1病棟が急性期治療病棟（38床）として運営開始 精神障害者を対象とする共同生活援助事業としてグループホームサンライズ荘開設 地域サービスタワー開設 指定介護療養型医療施設（2室8床） 第2病棟に談話室増設	介護保険制度スタート 17才少年による西鉄バス乗っ取り事件起こる 雪印集団食中毒事件発生 新紙幣2千円札発行 ストーカー規制法施行
2001年（平成13年）3月	精神科病棟入院基本料（15・1）200床届出受理される 精神科急性期治療病棟入院料（1）38床届出受理される 第2病棟 病室（1室1床）、診察室、喫煙室等を増築	日本の実習船「えひめ丸」がハワイ沖で米海軍原潜と衝突、 えひめ丸沈没 アメリカ同時多発テロ事件発生。 ニวยอร์กの世界貿易センタービルが倒壊

2002-2012

新時代の医療を実現する 飛躍期

アメリカ同時多発テロ事件以降、世界各地でテロ事件が多発。国内では大手企業を中心に復調傾向だった景気が2008年、アメリカのサブプライムローン問題に端を発する世界同時不況によって再び悪化、格差社会が広がった。そんななかで2011年3月、東日本大震災・福島第一原発事故が発生。多くの死傷者・被災者を出し、推定12万人が失業。復興費用は10年間で23兆円と見込まれている。



- 1 2002年10月、新病棟建設地鎮祭
- 2 2003年9月、新病棟北館竣工
- 3 北館外観
- 4 北館病棟の木目基調の個室
- 5 北館サービスステーションと間接照明をほどこした廊下
- 6 北館竣工記念講演（福岡大学名誉教授西園昌久先生をお迎えして）
- 7 2003年10月、北館内覧会で来場者をお出迎えするスタッフ
- 8 2005年12月、ブランド・ハイアット・福岡で盛大に執り行われた医療法人 浜江堂忘年会
- 9 2007年9月、第1回みんな祭で講演する西日本新聞社 安武信吾氏
- 10 みんな祭でユニフォームを紹介
- 11 毎週月曜日の法人職員の集礼

medical corporation
MINKODO
1962-2012

年月

年月	2002年(平成14年)	2003年(平成15年)	2004年(平成16年)	2005年(平成17年)	2006年(平成18年)	2007年(平成19年)	2008年(平成20年)	2009年(平成21年)	2010年(平成22年)	2011年(平成23年)	2012年(平成24年)
5月											
8月											
10月											
12月											
3月											
4月											
5月											
7月											
9月											
10月											
4月											
6月											
8月											
6月											
5月											
6月											
5月											
8月											
3月											
4月											

- ・新病棟建設予定地より遺跡出土。調査団による発掘調査
- ・八代院長 三野原義光就任。前院長鈴木高秋は名誉院長に
- ・北館新病棟建設着工
- ・創立40周年記念忘年会開催
- ・三野原和光理事長、浜江堂中長期計画を発表
- ・法人内のネットワークシステム稼働
- ・北館竣工、翌月、北館内覧会。40周年記念誌完成
- ・介護老人保健施設からサービスステーション、介護サービス評価認証取得（2年ごとの更新）
- ・毎朝の全体ミーティングを開始
- ・みんなの堂（ミニ）ティンセンター（広報部門）開設、広報誌の発行
- ・外来棟全面改装
- ・シヨートデイケア届出受理される
- ・リハビリテーション部を発足
- ・三代理事長 三野原義光就任
- ・第1回みんな祭（法人文化祭）開催。以降毎年開催される
- ・精神科地域移行実施加算届出受理される
- ・北館を開放病棟30床と閉鎖病棟30床、計60床の急性期病棟、療養病棟40床に再編する
- ・新経営理念発表、医療法人 浜江堂ブランディングコンセプト発表
- ・精神科急性期治療病棟1（60床）届出受理される
- ・ブランディングコンセプトおよび法人マスタープランの発表
- ・精神療養病棟入院基本料1（40床）届出受理される
- ・リワーク（復職支援）を開始
- ・第2期ブランディングコンセプト発表
- ・医療安全対策加算2届出受理される
- ・デイケア棟の全面改装
- ・精神療養病棟入院料（40床）退院調整加算届出受理される
- ・精神科救急搬送患者地域連携紹介加算届出受理される

医療法人 浜江堂の歴史

- ・新学習指導要領のゆとり教育スタート。学校完全週5日制に
- ・DV防止法が全面施行
- ・住民基本台帳ネットワーク開始
- ・小泉首相の訪朝で金正日総書記が日本人拉致を公式に認める
- ・新型肺炎SARSが世界的に流行
- ・米英によるイラク侵襲開始。イラク戦争はじまる
- ・12才少年による長崎男児誘拐殺人事件発生
- ・新潟県中越地震（震度7）発生。断続的に震度6級の余震
- ・スマトラ島沖地震発生（M9.3）。津波などにより20万人以上が死亡
- ・福岡県西方沖地震（M7.0）発生。福岡市で震度6弱を観測
- ・日本郵政株式会社が発足
- ・高齢者虐待防止法施行
- ・熊本市の慈恵病院が赤ちゃんボストの運用を開始
- ・日本郵政公社解散。日本郵政グループとして営業開始
- ・中国で製造された冷凍餃子から有毒成分を検出
- ・後期高齢者医療制度施行。特定健診 特定保健指導開始
- ・秋葉原通り魔事件が発生
- ・米大手証券会社リーマン・ブラザーズが経営破綻
- ・裁判員制度施行
- ・日本年金機構が発足
- ・小惑星探査機「はやぶさ」が地球に帰還
- ・改正臓器移植法が施行
- ・東日本大震災発生
- ・高さ634Mの東京スカイツリー竣工
- ・北太平洋上を中心に金環食を観測

社会の動き

展望

これからの地域精神科医療と 浜江堂の進む道



油山病院 院長 三野原 義光

わが国の精神科医療を諸外国と比較した際、その突出した病床数の多さと入院期間の長さに、これまで何度も批判の目が向けられてまいりました。人口当たりの精神疾患有病率や治療成績は他の先進国と比較してもさほど変わりありません。では一体何が諸外国との違いを生み出しているのでしょうか？

アメリカは国策として1960年代から精神科の病床を削減しました。しかし、実際は統計上医療機関としてカウントされないナーシングホームが多数存在しています。また、イタリヤでは精神科病院自体が廃止されたと日本のマスコミはこそって報じますが、実は病院としての機能を有する施設は継続して存在しており、むしろ今後はそれを増やす方向だということです。

現時点において、我々の精神科病床の一部は諸外国が医療機関と認めない部分の機能も併せ持っていることは事実です。しかし、少子高齢化で国家税収は伸び悩み、超高齢社会のなかで増大する医療費を抑制するしかない我が国において、この病床数と入院期間の国際比較が精神科病床を削減するためのネガティブキャンペーンと

して利用されている感はありません。

そのような逆風のなかで我々民間精神科病院は、WHOが世界一と認めた国民皆保険制度を今後も堅持しつつ、近未来の精神科医療のあるべき姿を国民に提示していく、という相反する2つの難しい課題を突き付けられています。

これからの精神科医療は「入院中心から外来あるいは在宅で患者さんをサポートしてゆく」ことが理想であると言われています。私はこの方向性に前々から異論はなく、そうあるべきと考えてきました。しかし、国家が民間病院の努力に対してしかるべき評価や援助を行い精神医療保健の将来ビジョンを強力に後押しする、という理想的な環境は今後も望めそうにありません。

ただ、私たちは常に臨床の最前線にいます。目前で治療に専念されている患者さんとご家族に少しでも安心を生む連続的で包括的なケアを提供するためにも、個々の病院の自助努力によって改革の大きな波を職員一丸となつてともに乗り切らねばなりません。

浜江堂はこれまで国家的な気運に先駆けて精神科リ

ハビリテーションに積極的に取り組み、成果をあげてきました。また、精神科急性期治療病棟を整備し、あらゆる疾患に対処できる外来受入れ体制も整えてまいりました。精神科訪問看護ステーションの立ち上げを市内でいち早く行ない、現在では1日約30人の患者さんをサポートしています。また、福岡市や早良区内で増え続ける認知症疾患をはじめとする高齢者の受入れシステムを、併設の介護老人保健施設からステーションと連携して開発してきました。これらはまさに精神科医療の未来を見据えた10年間の職員の日々の努力のたまものであったと言えます。

私は創立40周年記念誌の中で「創立50周年時にはわが国の精神科医療改革が終わり、それを乗り切った我々がそこにあるだろう」と述べました。しかし、その後10年間でわが国の精神科医療の改革は遅々として進まず、今まさにその改革の波が訪れようとしています。これまでの私たちが蓄積してきた精神科リハビリテーションのノウハウを存分に発揮し、それを地域の皆様に理解していただける時代がいつにやってきました。すでにシステムのおおまかなフレームは出来上がりました。次に求められるのは、これまで時間をかけて熟成させてきたソフトウェア面に堪え得るハードウェア面の整備を推し進めていくことです。

当院はこれから工期2年という長期の増改築にとりかかります。これは、われわれのノウハウを存分に発揮するための箱づくりであるとともに、今後の精神科医療の大改革に立ち向かうための皆づくりともいえます。

竣工後、現在100床の北館は60床×3単位の180床となります。中館(3病棟)5病棟は1単位となりベッド数は90床から58床に減少、1床あたりのアメニティが

飛躍的に向上し、不足している個室も増加します。南館(6病棟)は北館に吸収されます。内科療養病棟は延床面積が倍になり認知症疾患にも対応できる構造となります。作業療法その他の付属施設も大きく変貌します。

このように、浜江堂にとって長らく課題であった病棟や施設の更新が実現することは、60周年に向かって羽ばたこうとする私たちにとっての大きな力になるに違いありません。

しかし、ハードウェアの整備より最も大切なことは、患者さん受入れ体制の再構築、認知症高齢者の病院におけるバス運用と併設の介護老人保健施設とのシームレスな連携、多様化する慢性・急性期疾患への適切な対応、長期入院の是正と地域への展開、それを支えるデイケアや訪問看護の更なる拡大と充実など、職員が新しい施設の中でそれに見合ったソフトウェアをいかに開発し運用できるかにかかっています。

そのためには法人のこれまでの半世紀の中でかつてなかったような意識改革、構造改革がわれわれに求められるものと私は覚悟しています。

これからの人口減少化と少子高齢化における医療情勢は、精神科に限らず厳しいものになっていくのは明らかです。

しかし、われわれが患者さんや利用者、ご家族、地域のニーズに真摯にそして柔軟に対応し、求められる医療・看護・介護を提供していくかぎり、私たちの仕事に決して終わりはありません。

浜江堂は決して負けません。

経営理念である「和と活力と信念」をもって日本の精神科医療の未来に風穴をあけるつもりで、次の60周年に向けて全職員が一丸となつて頑張りま

地域包括ケアの拠点としての 介護老人保健施設 からざステーション

—2025年への展望—



介護老人保健施設 からざステーション 施設長 藤井 眞一

老人保健施設と からざステーションの歩み

医療法人浜江堂創立50周年、介護老人保健施設からざステーション開設15周年を迎え、からざステーションを代表して関係者の皆様方に心からの謝意を表します。

さて、老人保健施設（以下、老健）は、1987年に全国7カ所の指定された老健でのモデル事業からスタートし、翌年より本格実施されました。その後2000年には介護保険制度がスタートしたため、介護老人保健施設と名称が変更され現在に至っています。からざステーションも1997年に老健として開設され、2000年に介護老人保健施設となり、介護保険における中間施設として発展してきました。老健は全国で現在約3800施設・約35万床が整

備されています。1990年には176施設、14万床（全老健会員施設数のデータ）でしたが、2000年には2367施設、20・8万床に増加し、2011年には3395施設、31・2万床となっています。

この間、3回の介護報酬改定や食費・居住費の自己負担化（2005年）が実施され、2012年4月には4回目の改定が施行されました。特に、2006年の改定では、短期集中リハビリテーションや認知症短期集中リハビリテーションが新設され、2009年の改定ではそれらの単位引き上げや適用範囲拡大が実施となり、ますます維持期リハビリテーションを積極的に推進し、認知症リハビリテーションの充実を図っていくことが求められるようになりました。このことは老健が、リハビリテーションによる機能維持・改善の役割を担い、在宅復帰、在宅

支援のための地域の拠点となる施設であることが再確認されたといえるでしょう。

認知症リハビリテーションの発展

このような改定の流れに合わせて、からざステーションにおいても作業療法士の増員を行い、リハビリテーションの充実を図りました。さらには、開設時より積極的に取り組んできた認知症リハビリテーションやケアの多様な発展をめざして、2007年には他施設に先駆けてエビデンスに基づいた学習療法を導入を行い、2010年にはアニマルセラピーを開始しました。

学習療法では参加した利用者に様々な良い変化が見られるようになり、その成果を2008年の全国介護老人保健施設大会（京都）などで発表しています。利用者・ご家族にも好評で、定員枠を増やしても待機者がいる状態が続いています。アニマルセラピーも導入前に予測した以上の変化が利用者に見られ、ユニークな取り組みとしてテレビでも紹介されました。

これらに加えて現在では、クラフトグループの導入や音楽を利用したプログラムの追加など、さらに多様な取り組みを行っています。

またリハビリテーション以外でも、2010年の全国介護老人保健施設大会（岡山）において発表した演題「皮膚トラブルゼロを目指して」が1300以上の演題の中から奨励賞を初めて受賞し、その後伝統ある介護専門誌「おはよう21」に掲載されました。

2025年の介護老人保健施設 —地域包括ケアシステムの 中核的施設をめざして—

高齢者人口の増加に伴う認知症高齢者数の増加は大変重要な問題であり、2010年では280万人の認知症高齢者が2025年には470万人（約1.7倍）に達すると推計されています。また、全国的に老健の課題として要介護度の重度化、平均在所日数の長期化、在宅復帰率の低下などが指摘されています。2025年は団塊の世代が一齐に後期高齢者となるエポックメイキングの年であり、その年にあるべき姿として示されたのが「地域包括ケアシステム」です。このシステムの構築では、日常生活圏域において医療と介護を一体的に提供して、24時間365日安心して暮らせる地域社会をめざしています。2012年の介護報酬改定は、まさにこの地域包括ケアの時代に向かって舵をきった改定となりました。

この地域包括ケアの方向性は、全老健が長年掲げてきた「理念と役割」とまったく一致しており、からざステーション運営理念の「地域の福祉と保健の向上につとめます」という言葉も同様です。

2025年の介護老人保健施設は現在の役割に加えて地域包括ケアの拠点を担い、地域リハビリテーション支援センターや在宅復帰支援・在宅ケア支援の中核的施設へと発展していくものと思われれます。からざステーションもそのような方向に向かって、法人の高齢者プロジェクトとの連携を深めつつ、自らの運営理念に基づき前進して行く所存です。

1 病院概要

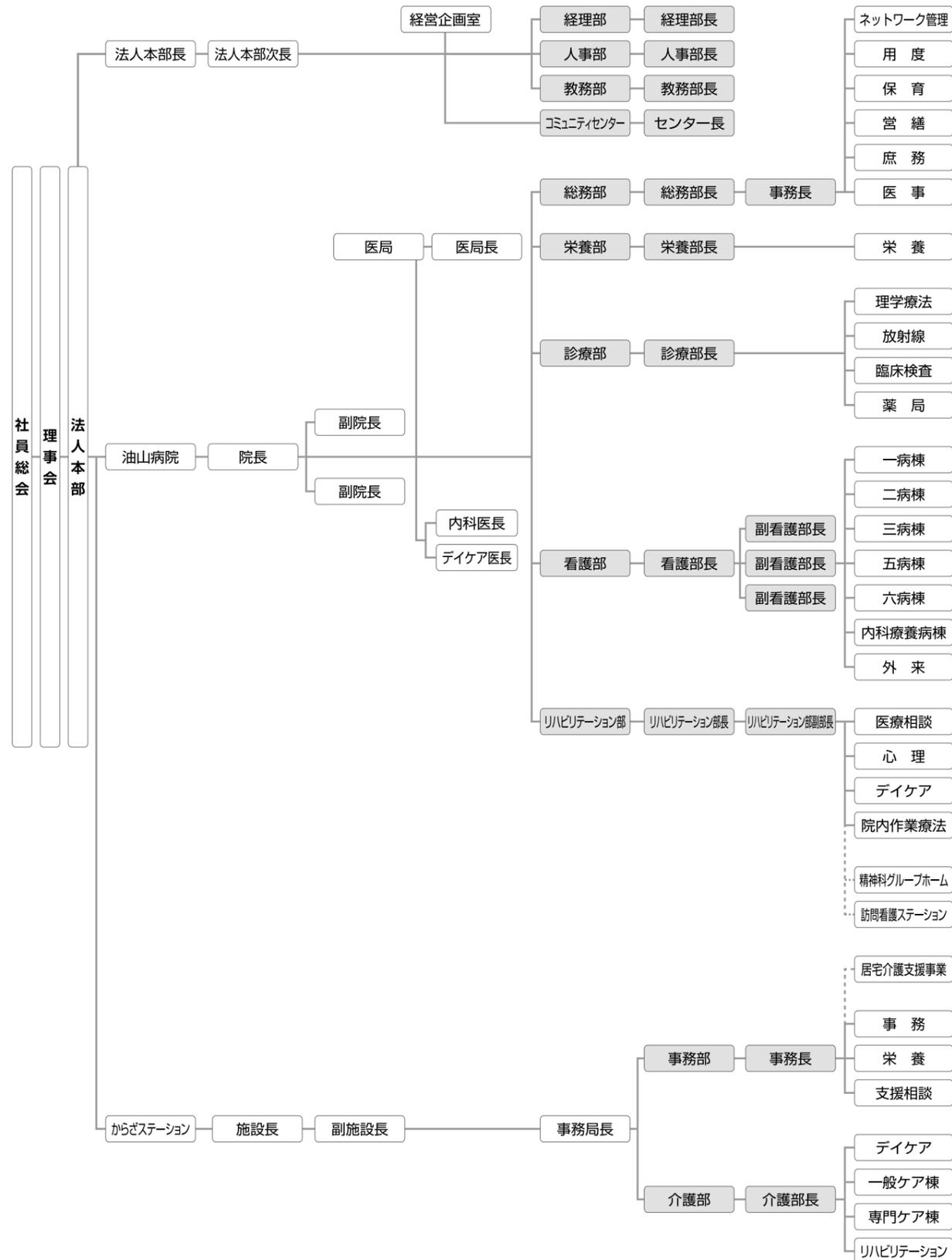
医療法人浜江堂 油山病院

病院名	医療法人浜江堂 油山病院	
所在地	〒814-0171 福岡市早良区野芥5丁目6-37	
開設	1962年3月20日	
管理者	三野原 義光	
理事長	三野原 義光	
院長	三野原 義光	
敷地面積	17,626㎡	
総床面積	8,920㎡	
診療科目	精神科・内科、専門外来／もの忘れ外来	
認可病床数	283床 精神科急性期治療病棟／60床 精神科療養病棟／40床 精神科一般病棟／138床(48床、50床、40床) 内科療養病棟／45床	
職員数	240名(2012.4.1現在) 医師13名(常勤8名・非常勤5名)、看護師78名、准看護師34名、看護補助者41名、 薬剤師6名、放射線技師1名、臨床検査技師1名、精神保健福祉士6名、心理士5名、 管理栄養士2名、作業療法士12名、保育士5名、事務職員・その他34名	
基準承認事項	〈入院〉精神科急性期治療病棟入院料1、精神科療養病棟入院料、精神科病棟入院基本料(15対1) 看護配置加算 看護補助加算2、療養病棟入院基本料、精神作業療法、薬剤管理指導料、 医療保護入院等診療加算、栄養管理実施加算、精神科地域移行実施加算、精神科身体合併症管理加算、療養病棟療養環境加算4、褥瘡患者管理加算、退院調整加算、入院時食事療養(I)・入院時生活療養(I)、医療安全管理加算2 後発医薬品使用体制加算、精神科救急搬送患者地域連携紹介加算 〈外来〉精神科デイケア(大規模)、精神科ナイトケア、精神科デイナイトケア、 精神科ショートデイケア(大規模)	
その他	医師臨床研修指定協力病院、福岡市医師会看護専門学校実習指導病院、 福岡市認知症疾患医療連携協力病院	
関連施設	●介護老人保健施設からざステーション 〒814-0171 福岡市早良区野芥5丁目6-38 ●訪問看護ステーションあいらす 〒814-0171 福岡市早良区野芥5丁目6-37 ●居宅介護支援事業所ケアセンターのぞみ 〒814-0171 福岡市早良区野芥5丁目6-38 ●グループホームサンライズ荘 〒814-0171 福岡市早良区野芥5丁目6-37 (精神障害者を対象とする共同生活援助事業)	

医療法人浜江堂 介護老人保健施設からざステーション

施設名	医療法人浜江堂 介護老人保健施設からざステーション	
所在地	〒814-0171 福岡市早良区野芥5丁目6-38	
開設	1997年10月9日	
理事長	三野原 義光	
施設長	藤井 眞一	
総床面積	4,100㎡	
事業形態	精神科内科病院併設 認知症対応型介護老人保健施設	
施設種別	認知症専門棟(40床)、一般棟(40床)／入所者数80名(短期入所含む)、通所者数30名	
設備	療養室(一人あたり8㎡)、機能訓練室、食堂、特殊浴槽1台、送迎車両6台(うちリフト車2台)、 家族介護教室、家族相談室、ボランティア室、研修室など	
職員数	60名(2012.4.1現在) 医師1名、看護師2名、准看護師8名、介護福祉士20名、介護職員15名、作業療法士5名、 管理栄養士1名、支援相談員4名、事務職員・その他4名	

2 組織図



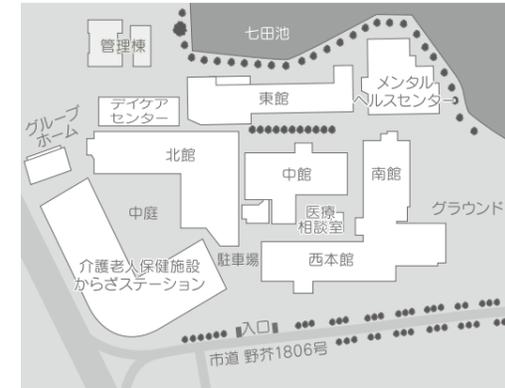
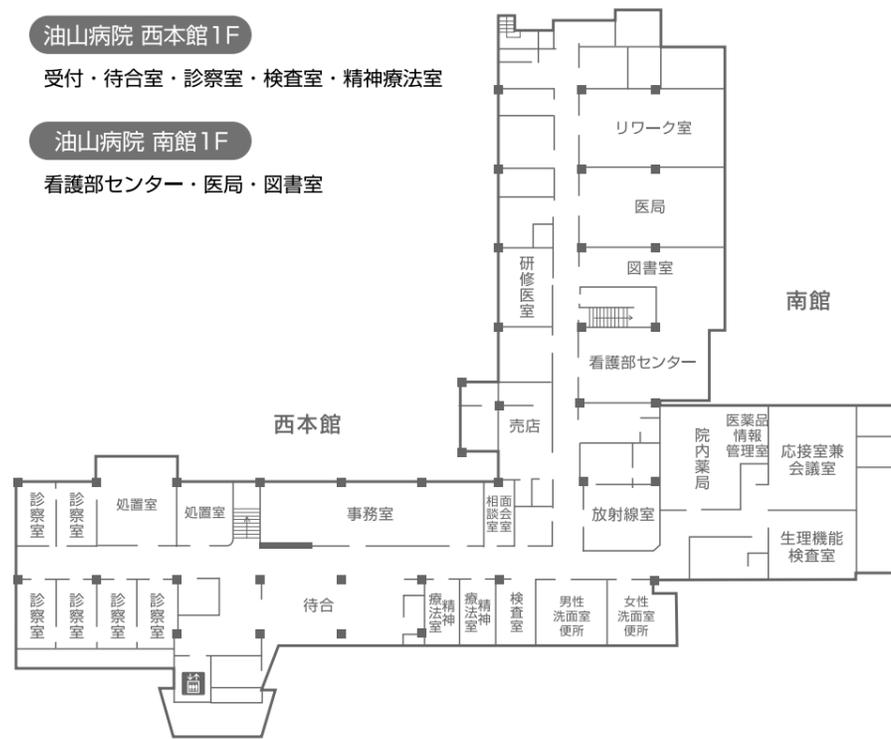
3 平面図

油山病院 西本館1F

受付・待合室・診察室・検査室・精神療教室

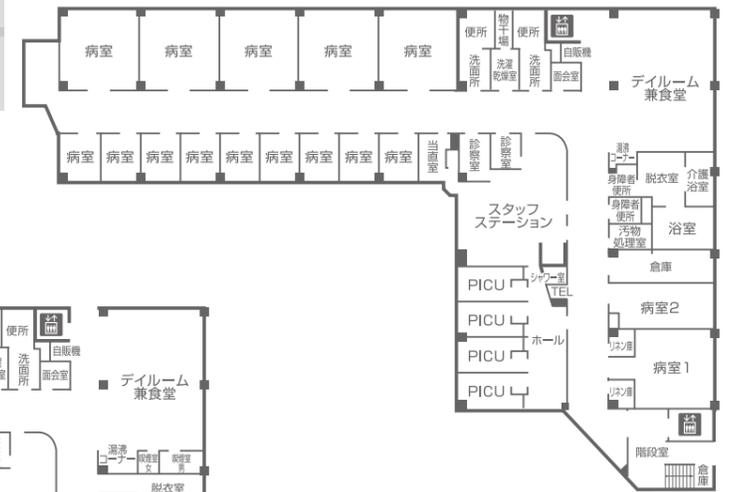
油山病院 南館1F

看護部センター・医局・図書室



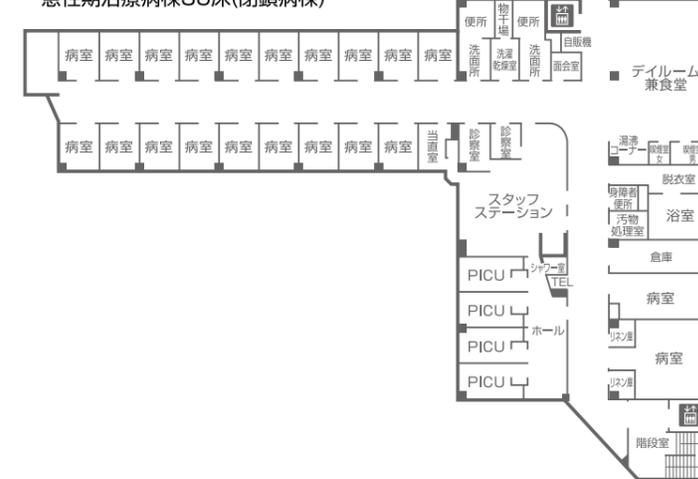
油山病院 北館1F

精神療養病棟40床(閉鎖病棟)



油山病院 北館2F

急性期治療病棟30床(閉鎖病棟)



油山病院 西本館2F

内科療養病棟45床

油山病院 南館2F

精神科一般病棟48床



油山病院 中館1F

精神科一般病棟40床



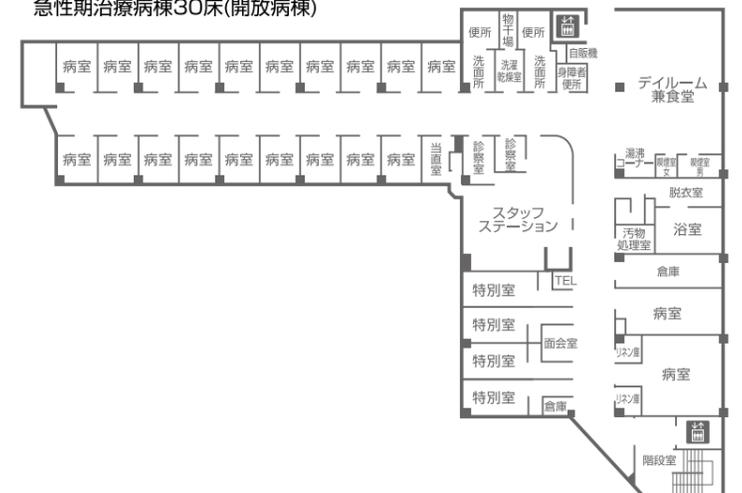
油山病院 北館4F

多目的ホール



油山病院 北館3F

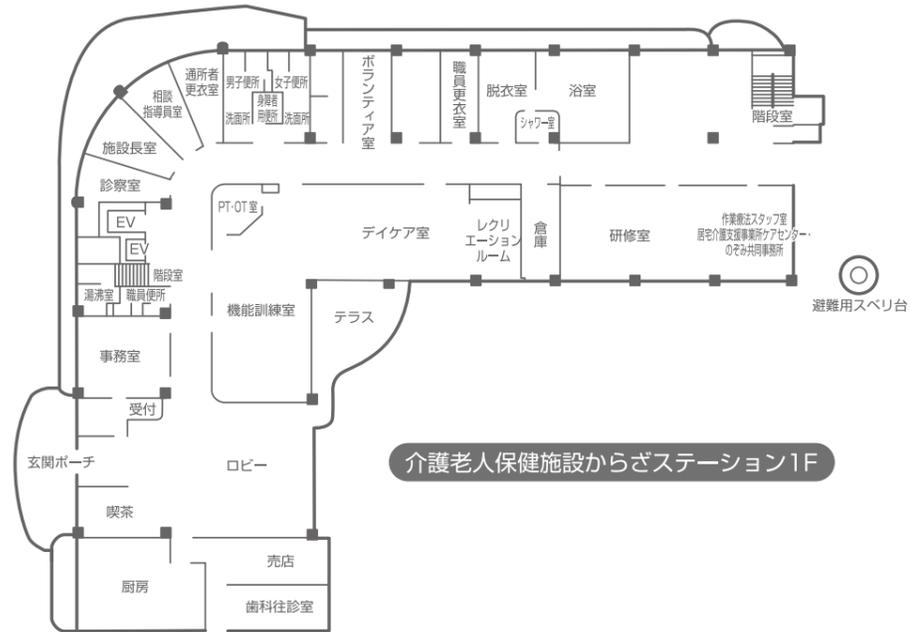
急性期治療病棟30床(開放病棟)



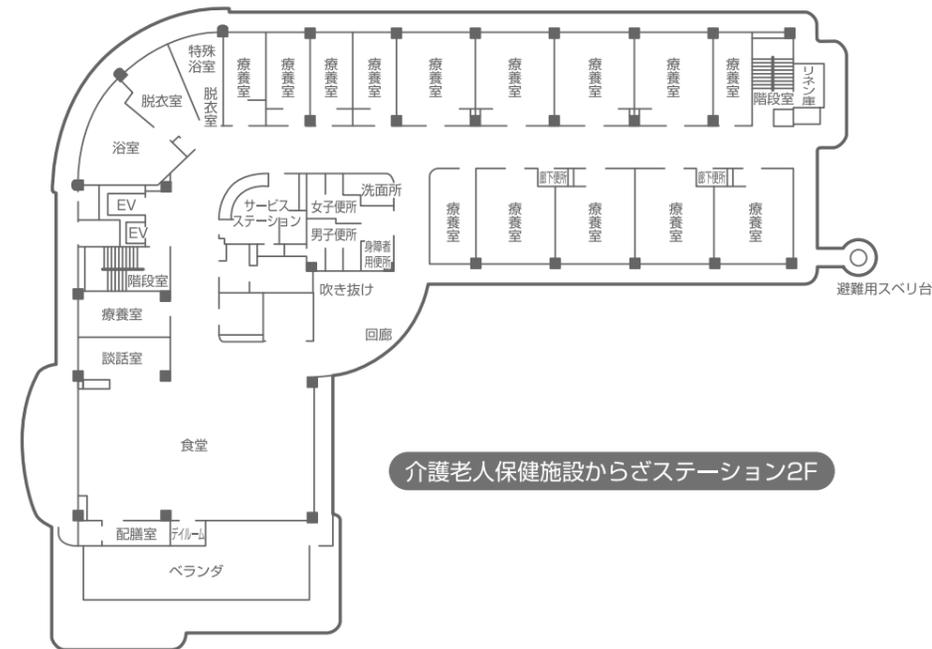
油山病院 中館2F

精神科一般病棟50床

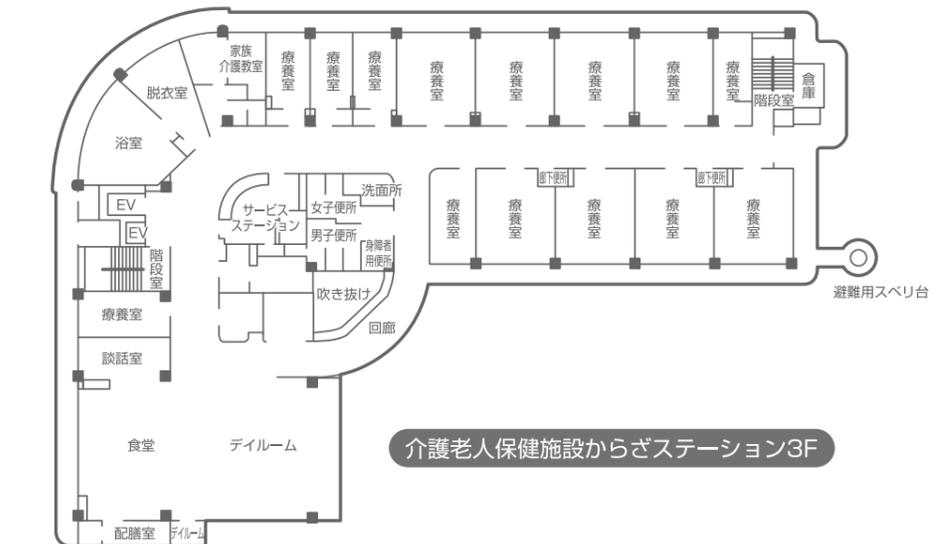




介護老人保健施設からぎステーション1F



介護老人保健施設からぎステーション2F

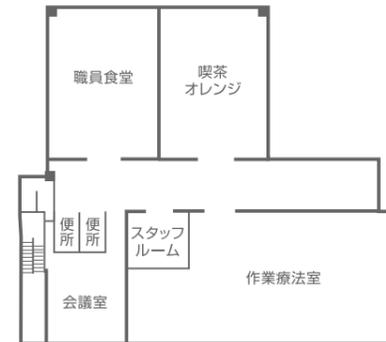


介護老人保健施設からぎステーション3F

油山病院 東館
心理室・訪問看護ステーション



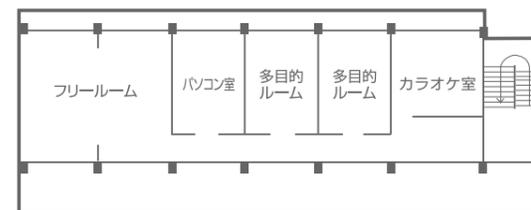
油山病院 メンタルヘルスセンター2F
作業療法室・喫茶オレンジ・職員食堂



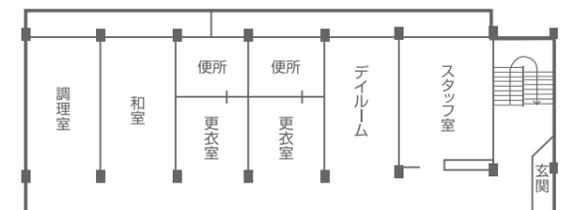
油山病院 メンタルヘルスセンター1F
センター食堂・調理室



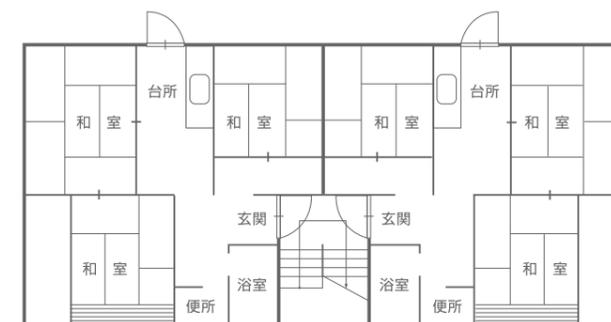
油山病院 デイケア棟2F



油山病院 デイケア棟1F



グループホームサンライズ荘



5 学会発表一覧

■過去10年間の部署別学会発表の記録（受賞記録など）

油山病院

医局

- 2003年10月 日本精神分析学会 第49回大会・札幌市
古賀 靖彦 「指定討論演題:こころのなかみを身体に排出すること」
- 2004年10月 日本精神分析学会 第50回大会・東京都
古賀 靖彦 「一般演題:子宮内体験とその意義」
「教育研修セミナー:夢の臨床」
- 2005年10月 日本精神分析学会 第51回大会・広島市
古賀 靖彦 「シンポジウム:クライン学派における超自我」(学会奨励賞を受賞)
- 2006年11月 日本精神分析学会 第52回大会・名古屋市
古賀 靖彦 「教育研修セミナー:精神医学と精神分析と私」
- 2007年10月 日本精神分析学会 第53回大会・東京都
古賀 靖彦 「教育研修セミナー:ピオン — セッション中に進展してくるもの」
- 2009年11月 日本精神分析学会 第55回大会・大阪市
古賀 靖彦 「教育研修セミナー:ロナルド・ブリトン — ピオンとの対話」
- 2010年 7月 The EPF-NAP Sac Conference・ポルトガル
古賀 靖彦 「症例提示と討論」
- 2010年10月 日本精神分析学会 第56回大会・東京都
古賀 靖彦 「一般演題:病理組織体からの脱出 — ワークスルーの観点から」

著作／西園昌久監修「現代フロイト読本2」(共著) 古賀靖彦著「フロイトにおける自我の分裂」(みすず書房／2008)

リハビリテーション部

- 2003年 3月 第66回 福岡県デイケア研究協議会・飯塚市
石谷 直子 「デイケアスタッフのスキルアップ」
- 2003年 7月 第26回 九州集団療法研究会・大牟田市
佐藤 美佳 「活動と自分を振り返って ～グループを担当して感じたこと」
- 2005年10月 第30回 九州集団療法研究会・豊前市
田原 照人 「当院デイケアにおける治療プログラムの構造と特徴を考える」
- 2006年 3月 第72回 福岡県デイケア研究協議会・福岡市
奥田 一平 「デイケアを利用する若者の今と昔 ～当院デイケアの10年をふりかえって」
- 2008年 3月 ジョブコーチネットワークセミナー・東京都
山口 隆幸 「当院精神科デイケアにおける就労支援」

4 委員会活動

※設置が義務づけられている委員会

区分	名称	開催
法人	個人情報保護管理委員会 ※	不定期
法人	個人情報保護検討委員会 ※	不定期
法人	セクシャルハラスメント防止委員会 ※	不定期
法人	法人学習委員会	月1回
法人	介護フェスタ運営委員会	不定期
法人	高齢者プロジェクト委員会	不定期
法人	グループホームサンライズ荘運営委員会	年1回
法人	季刊誌「油山」編集委員会	不定期
法人	みんみん祭運営委員会	年2回
法人	みんみん祭準備委員会	年5回
病院	医療安全管理委員会 ※	月1回
病院	院内感染対策委員会 ※	月1回
病院	労働安全衛生委員会 ※	月1回
病院	医療ガス安全管理委員会 ※	年1回
病院	褥瘡対策委員会 ※	月1回
病院	行動制限最小化委員会 ※	月4回
病院	栄養委員会 ※	月1回
病院	サービス向上委員会	月1回
病院	ホスピタリティ推進委員会	月1回
病院	看護学習委員会	月1回
病院	救急委員会	月1回
病院	記録委員会	月1回
病院	SST 委員会	月1回
病院	作業レクリエーション委員会	月1回
病院	リハビリテーション部会	週1回
病院	作業会議	月1回
老健	感染対策委員会	月1回
老健	救急委員会	月1回
老健	褥瘡対策委員会	月1回
老健	サービス向上委員会	月1回
老健	食事ケア委員会	月1回
老健	排泄委員会	月1回
老健	レクリエーション委員会	月1回
老健	施設内学習委員会	月1回
老健	ケアプラン委員会	月1回
老健	生活安全リハビリテーション委員会	月1回
老健	学習療法委員会	月1回
老健	マニュアル委員会	月1回
老健	アニマルセラピー委員会	月1回
老健	かけはしの会	月1回
老健	実習指導委員会	月1回
老健	アルバム委員会	月1回

●2009年10月 第55回 九州精神保健学会・熊本県
中澤まり子 「看護補助者の可能性 ～精神療養病棟における看護補助者の役割」
秦野 修 「ポジティブスキルトレーニングの効果と実際 ～Yes we can! change the nursing」

●2010年10月 第56回 九州精神保健学会・長崎県
鈴木 康子 「エコ活動を利用した社会復帰の第一歩 ～牛乳パックリサイクル運動を試みて」
(ポスター発表の部で優秀賞を受賞)
和田はるか 「急性期治療病棟の変遷 ～看護スタッフのストレスがパワーへ」

●2011年10月 第57回 九州精神保健学会・福岡市
立川 亮太 「単剤化への取り組み ～関わりの中で見えたこと」
鳥飼 悦子 「慢性期への退院に向けてのアプローチ ～はじめの一歩」
小寺 里代 「便秘解消への看護の取り組み ～快便生活を目指して」

栄養部

●2010年 3月 第29回 食事療法学会 パネル発表・宮崎県
野中彌恵子 「栄養管理の簡便化と食形態の改善 ～新ゲル化剤を導入して」

●2010年 9月 第16回 日本摂食・嚥下リハビリテーション大会・新潟県
野中彌恵子 「認知症や精神疾患の嚥下困難とムセに組み込む ～ミキサーゲルを使用し食形態の改善」

介護老人保健施設からぎステーション

●2002年10月 第13回 全国介護老人保健施設大会・福岡県
八木 寿美 「閉ざされた心 笑ってYさん! 個別ケアを試みて」

●2004年11月 第15回 全国介護老人保健施設大会・香川県
大神 雅也 「介護にも出来るオーラルライトリハビリテーション ～マッサージ効果抜群」

●2005年 8月 第16回 全国介護老人保健施設大会・神奈川県
江戸 優子 「在宅復帰へ向けての第一歩 ～家族へのアプローチ」

●2008年 8月 第19回 全国介護老人保健施設大会・京都府
百武 孝 「学習療法の取り組みを通して」
野田 圭佑 「まだ座つとかないかんと ～座ってみんしゃい、きつかけん」

●2010年11月 第21回 全国介護老人保健施設大会・岡山県
野田 景子 「ハーモニーベルが認知症高齢者に及ぼす影響について」
八山 幸江 「皮膚トラブルゼロを目指して」(大会奨励賞を受賞)

●2012年10月 第23回 全国介護老人保健施設大会・沖縄県
正木 大吾 「ストレスなくして笑顔で介護」

●2009年11月 第79回 福岡県デイケア研究協議会・久留米市
田原 照人 「長期入院患者の地域移行への試み」

●2010年 7月 第8回 福岡市西南地区精神科病診連携の会
奥田 一平 「復職リワークプログラム」

●2010年10月 第56回 九州精神保健学会・長崎県
内野 秀雄 「油山病院における地域移行支援 ～病院組織全体での取り組みによる実践」

●2011年 9月 第9回 日本スポーツ精神医学会・東京都
朱雀 真矢 「若い統合失調症患者へのスポーツを介した個人療法の取り組み」

●2011年10月 第57回 九州精神保健学会・福岡市
前田美咲子 「長期入院患者が主体的な生活を獲得するために ～ボランティア部という活動を通して」

●2011年11月 第83回 福岡県デイケア研究協議会・春日市
朱雀 真矢 「デイケアにおける運動、スポーツ活動の治療的意義について」

看護部

●2002年11月 第14回 西日本精神保健学会・大分県
川上 孝徳 「多飲と人格荒廃」
山本美紀代 「看護プログラムバンザイ」
植木 瑞徳 「糖尿病教室の試み」

●2003年11月 第49回 九州精神保健学会・久留米市
川上 孝徳 「多飲と人格荒廃その2」
村上由美子 「外来診療に於ける患者満足度及びその対策」
川野 哲夫 「保護室の頻回使用を避け得た3症例」

●2004年11月 第50回 九州精神保健学会・佐賀県
後藤 一信 「意見箱よりみた病院の評価」(「精神障害者の看護技術向上の研究」として表彰)
梶原 剛 「統合失調症における病識」

●2005年11月 第51回 九州精神保健学会・福岡市
後藤 一信 「意見箱よりみた病院の評価」
梶原 剛 「社会的入院患者への自立支援調査」
山本美紀代 「喫煙調査(Ⅲ)」

●2006年11月 第52回 九州精神保健学会・沖縄県
宮田 正憲 「長期入院患者の自立向上と退院に向けて」
畑 聡子 「ホスピタリティ推進活動報告」

●2007年11月 第53回 九州精神保健学会・北九州市
島田 勇樹 「SSTを生かした長期入院患者へのアプローチ」
豊留 浩 「精神科訪問看護の効果」

●2008年10月 第54回 九州精神保健学会・宮崎県
元木 明代 「くもん学習療法の導入 ～精神症状の軽減、隔離解除を目指して」
徳永 友和 「精神科急性期病棟における集団療法への取り組み ～看護のスキルアップを目指して」
宮口 妙子 「長期入院患者への退院サポートを振り返り」(「精神障害者の看護技術向上の研究」として表彰)

⑥ グループホーム

グループホームサンライズ荘（精神障害者を対象とする共同生活援助事業）の歩み

サンライズ荘サービス管理責任者 石谷 直子

当法人がグループホームに目を向け始めたのは1998年、精神保健福祉法が制定されて間もないころのことです。この医療と福祉の連携を示唆する法律は、縁あって当法人の医療に身を置く精神障害の方々との社会参加について、より積極的かつ本人の生活に踏み込んだお手伝いがしたいと、常々思っていた私たち医療従事者を勇気づけるものでした。

私たちはさっそく近隣のアパートを借り、グループホームを作りました。ここは認可を受けるには狭すぎ、談話室も設けることができませんでしたが、



グループホームサンライズ荘の外観

スタッフは熱心で、朝出勤前に訪問し、必要があれば夜中でも出向きました。毎週食材を持って順番に部屋を訪れ、皆で食事をしました。この実績が認められ、翌年には法人の古い職員宿舎を改装したグループホームができあがり、2000年、県の認可を受けた共同生活援助事業を立ち上げることができました。

以来12年、おもに当院を様々な事情で退院できなかった長期入院者を受け入れてきました。トラブルも少なからずありましたが、皆さん概ね順調に思っているのを楽しんでおられます。ただほとんどが実生活から長く離れていた方々で、単身生活への移行となると甚だ難しく、十分な成果が上がりていないのが現状です。また施設の老朽化も進んでいるため、グループホームのありかたを考えなおす時期にきています。これからも長期入院を防止し、楽しい社会参加を提供できる施設として存続するため、さらなる工夫をしたいと思います。



食事準備中のボランティアの方

⑦ 福利厚生施設

湯布院保養所やまなみ荘

油山病院 総務部 主任 中野 直幸



やまなみ荘全景

やまなみ荘は職員の福利厚生施設として1980年9月に大分県湯布院町に開設され、今年で32年目と長い歴史があります。開設当初は2階建ての2階部分のみが宿泊施設でした。当時は高速道も開通しておらず、片道4時間もかかるなど非常に利用しづらい状況でした。その後、大分自動車道の開通で交通アクセスも格段によくなり、利用者の増加により1999年に改装を行い、各階に宿泊施設を備えた現在の形になりました。

現在のやまなみ荘は鉄筋2階建て、各階ともに3LDKの間取りとなっており、6畳の和室が2室、洋室が1室、2階にはオープンカウンターのキッチンと10畳ほどのリビングがあり、家族や大勢の人たちとゆったりと過ごせるスペースを備えています。また、施設には温泉が引かれ、軟水で肌にやさしく美肌効果も抜群です。周辺環境も由布高原の四季折々のあざやかな自然や、由布岳、九重連山を見渡す雄大な眺望、さわやかな空気の

なかで、ゆったりとした時間が過ごせます。観光も車で10分程で湯布院駅周辺へ行くことができ、湯の平街道や金鱗湖など湯布院観光に最適です。少し足をのばせばアフリカンサファリやうみたまご、高崎山自然動物園といった別府、大分方面への観光などにも利用できます。

やまなみ荘への交通アクセスは福岡市内から車で九州道、大分道乗りつぎ、約2時間。湯布院インターを降り5分ほどで到着します。近年の利用状況としては、2010年21組103名、2011年39組145名と利用者も急増傾向にあるようです。

やまなみ荘は職員なら誰でも利用できる施設です。予約は3カ月前より、先着順で受け付けておりますので、早めの予約をお願いします。

これからも、職員のみならずに気持ち良く利用していただけるような施設管理を心掛けていきますので、みなさんのご協力とたくさんの方々の利用をお待ちしています。



開設当時のパンフレット



やまなみ荘室内



やまなみ荘から湯布院を望む

エンゼル保育園の歩み (託児所から保育園へ)

油山病院 総務部 エンゼル保育園園長 井上 晶美 (保育士)

託児所としてスタートした エンゼル保育園

1971年4月、病院の育子看護師を確保することを目的として、当法人に院内保育所が開設されました。当初は、職員寮の1階を託児所として開放し、保育士1名と預かり児童1名からのスタートとなりました。現在は福岡市内だけでも数多くの院内保育所が開設されていますが、当時はまだ珍しく、当法人はいち早く福利厚生の充実を図っていたといえます。昔から受け継がれている「温かくアットホームな保育」を念頭に、小規模だからこそ実現できる「一人ひとりの子どもと向き合う保育」を展開し、現在もエンゼル保育園の保育方針として継承しています。

実は私も幼少期を浜江堂の託児所で過ごしたうちのひとり（いわば、エンゼル保育園卒園児）で、両親が働いて



いつの時代も大将がいる。
中央奥は保育園当時の筆者（1974年）

いる間、託児所でお世話になりました。お友だちとままごとをして遊んだり、中庭で遊んでいたことを今でも鮮明に覚えています。

保育園としての取り組み

私が浜江堂に就職させていただき早いもので20年の月日が流れようとしています。「託児所から保育園へ」と移行していくなかで、自己流ではありませんが様々な取り組みを行ってきました。保護者と保育園を繋ぐ「れんらくノート」の発行。保育園における情報発信、共有のための「園だより」の発行。また、個人面談や保護者会の開催。ここ数年においては、保育士の専門性を高めるために「研修会への参加」を積極的に行ってきました。研修会への参加は、基礎的な知識を習得すると同時に、過去の様々な保育事例を整理し一般化



2005年のクリスマス会



1994年、会長・山田常務と一緒に記念写真

して、子育ての知識や技術として日々の実践につなげています。もちろんたくさんの方の保護者の経験から積み重ねられた知識を、専門家として学ばせていただいたことも多くあります。最後は行事への参加です。四季折々、エンゼル保育園は楽しい行事がいっぱいです。園外保育や卒園式、油山病院や介護老人保健施設「からぎステーション」と一緒に参加するあじさいまつり、クリスマス会、豆まきなど。保護者主催の海水浴やもちつき大会なども開催されています。様々な行事を通して、子ど

もたちの大きな成長を感じとっていた。ただ大変貴重な機会であることはもちろんのこと、油山病院の患者さん、からぎステーション利用者の方々と交流を持つことは、子どもたちにとってこのうえない素敵な「保育環境」である、と、確信しています。

エンゼル保育園としての展望

医療・福祉を取り巻く環境が急激に変化するなかで、子育てをしながら仕事をする保護者のストレスを軽減していくことは、私たち保育士にとつての「使命」だと感じています。子どもたちの笑顔こそ働いている保護者にとって大きな原動力となっているのには言うまでもありません。今日落ち込んでいても明日またがんばろうと思えるのが保育であり子育てです。子どもを真ん中に、保育者と保護者が笑顔で語り合おう。そのなかで子どもは満たされ、幸せ感たっぷりになることができるのではないのでしょうか。今後、次のステップに向けて、保護者と、そして子どもたちと、ゆっくり大きく歩んでいきたいと思えます。



最近屋外保育を熱心に行い、自然のなかでのびのびとした感性を育てる工夫をしている。
(2012年5月 園外保育の様子)



エンゼル保育園外観

スポーツクラブ

法人本部 教務部長 川上 孝徳

当法人は創立当初からスポーツ活動が盛んで、これまでたくさんの方々のスポーツ活動を行ってまいりました。現在継続して行われているのは、9人制バレーボール、野球、サッカー、ボウリングです。なかでもバレーボールは昨年(2011年)、創立以来はじめての福岡地区大会と福岡県大会でダブル優勝しました。部員数も過去最高となり、今年は2連覇を目標に頑張っています。野球も10年前から地域の精神科病院で作った4病院野球大会に年2回出場し、これまでに5回優勝しています。

部員もここ数年は若返り、活気に満ちた試合を毎回行っています。サッカーも若手が多くなり、フットサルの大会に出場しています。ボウリングは毎月1回の病院対抗ボウリング大会に参加しています。このように当法人内ではスポーツ活動が盛んです。これは法人理念である「和と活力と信念」に繋がるものだと思います。これからもこのようなスポーツ活動が継続され職員間の親睦が深まり、働きやすい楽しい職場になればと願っています。



おおいに盛り上がったバレーボール祝勝会



2011年度 バレーボール福精協地区大会優勝



2012年 バレーボール大会後に、ハイ！ピース



2012年 新ユニフォームでの初試合

職員チーム活動(プロジェクトM)について

法人本部 教務部長 川上 孝徳

2008年、3代目理事長が掲げられた新経営理念「和と活力と信念」が発表されました。そのなかには3つの約束として、利用者への約束(安心、安全、自己研鑽)、地域への約束(調和、開放化、啓蒙運動)、職員への約束(労働環境、生活環境、自己実現)と私たち職員が目標とすることが具体的に標されています。この約束を達成するために、私たち全職員は、役職を中心とした6チームに分かれ、役職者はチーム班長として、理念達成のための目標を掲げ、1年間活動に取り組んでいます。これは地域住民や法人にも貢献できる活動です。またほとんどの活動は時間外に行われ、ボランティア精神も醸成され、さらにリーダーのマネジメント能力の向上にも繋がっています。2011年度、各チームで取り組んだ活動を下記に紹介します。



プロジェクトごとに活動状況をアピールするボードも設置

ジュピターチーム 2011年度 班長 看護部係長 赤石 哲太郎
地域住民の子どもたちの安全を守るため、地域パトロールに参加しています。

ゼウスチーム 2011年度 班長 リハビリテーション部主任 伊藤 雄二
四季おりおりの院内マップを作り、入院・入所されている患者さんたちの心を癒します。

シリウスチーム 2011年度 班長 からさステーション介護部主任 近藤 真理子
施設内美化運動を推進し、職員の協力を得て、毎週水曜日の昼休み10分間を個人清掃時間として整理整頓に努めています。

ヴィーナスチーム 2011年度 班長 人事部課長 木塚 八郎
地域活動支援センター「ふらっと」の開設準備から関わり、個人の畑を利用して食材支援を行っております。

ペガサスチーム 2011年度 班長 看護部課長 桑島 裕子
環境美化を手掛け、中庭に花壇を作り、院内花いっぱい運動を行っています。

ホクトチーム 2011年度 班長 看護部副部長 見城 隆俊
世界の恵まれない子どもたちを病気から救うため、ペットボトルキャップを集め、ワクチン代に換え支援しています。また地域の小学校にも働きかけ協力していただいています。

浜江堂歌

作詞 一丸 章 編詞 三野原 信二
作曲 江口 保之 編曲 今給黎 博美



1. なごやかに あ さ をうた え ば
2. さざめきて ひ る をあゆ め ば
3. えまいつつ ゆ う べをま て ば



の もやまも むら さ きに、にお う よ む つまじく て を
お のかみの い の
と 一きひも はな の ごと、とも る よ ひ とのよの やま



く みか わし いき るわれ ら は やむ ひ とを とも
せ んだ つを しの ぶわれ ら は やむ ひ とを いた
い うせ よと ねが うわれ ら は とこ と わの あい



と する な か ま あ あ しら か べも はえ
く しむ な か ま あ あ れき し もふ る一
を する な か ま あ あ いの ち のそ の一



て われ ら の われ ら の みんこ お ど一 お
ぎ われ ら の われ ら の みんこ お ど一 お
う われ ら の われ ら の みんこ お ど一 お



よ
よ
よ

浜江堂歌

作詞 一丸 章
作曲 江口 保之

編詞 三野原 信二
編曲 今給黎 博美

なごやかに 朝を歌えば
野も山も むらさきに匂うよ
睦まじく手を組みかわし 生きるわれらは
病む人を 友とする仲間
ああ 白壁も映えて
我らの 我らの 浜江堂よ

さざめきて 昼を歩めば
丘のべも あかあかと燃えるよ
そのかみの医の先達を 惚ぶわれらは
病む人を いつくしむ仲間
ああ 歴史も古き
我らの 我らの 浜江堂よ

笑まいつつ 夕べを待てば
遠き灯も 花のごともるよ
人の世の病い失せよと 願うわれらは
永遠の 愛を知る仲間
ああ 生命の園生
我らの 我らの 浜江堂よ

法人歌の原曲である「油山病院歌」は1988年、三野原和光第2代理事長(現会長)が母校、福岡高校の先輩詩人一丸章氏に作詞を、同校音楽教師江口保之氏に作曲を依頼して制定されたものである。

その後、法人組織の拡大により新しい法人歌の作成が検討されてきた。2008年6月20日開催の三野原義光第3代理事長の「新経営理念発表会」を機会に、三野原信二副理事長プロデュース(兼編詞者)のもと、編曲を今給黎博美氏、独奏をテノール歌手小牧達彦氏に依頼していた法人歌「浜江堂歌」が完成、当日初演(CD)された。以降、医療法人浜江堂全体集会(集礼)において、毎回、全員で斉唱されている。

〈診療部 放射線室長 進藤順二〉

PROFILE

一丸 章 いちまる あきら

浜江堂歌の原曲 油山病院歌作詞者・詩人。1920年7月27日福岡市生まれ。福岡市早良区高取在住。1937年福岡中学(現福岡高校)卒。福岡詩人会創立・代表幹事。1973年、詩集『天鼓』(1972年6月思想社)により、九州在住詩人として初の第23回H氏賞受賞。春日南小学校歌、須玖小学校歌作詞。NHK福岡放送局、KBC九州朝日放送などで脚本執筆。一方、各地の短大・文化サークルの講師として地域文化の向上に努め、福岡市文化賞はじめ福岡県教育文化功労賞、地域文化功労者文部大臣表彰、先達詩人顕彰などを受賞。2002年6月2日死去

今給黎 博美 いまきいれ ひろみ

浜江堂歌編曲者・プレイヤー・作曲家・アレンジャー。1953年生まれ。長崎県大村市出身。15歳でギターを始め、20歳よりキーボード奏者として佐世保で活躍。福岡でのバンド活動を経て1980年上京、「クリスタルキング」のメンバーとしてデビュー。「大都会」「曇気楼」「北斗の拳」等数々のヒット曲を生む。1989年拠点を福岡に移し、音楽制作の傍ら西新ヤマハ「WEST POINT」アレンジセミナー講師、ピアノ、キーボード科講師としても活躍中。

江口 保之 えぐち やすゆき

浜江堂歌の原曲 油山病院歌作曲者。1918年生まれ。福岡市中央区警固本町在住。武蔵野音楽学校(現 武蔵野音楽大学)卒業後、福岡高校初の専任音楽教師として着任。以来45年、高校・大学の音楽教育に携わりレベルの向上に尽くすとともに多数の音楽家を輩出した。秋月中学校歌、香住丘小学校歌、春日東小学校歌、月隈小学校歌、鹿島実業高校校歌などを作曲した。西部合唱連盟理事長、九州高等学校音楽教育連盟理事長、NHK福岡放送児童合唱団、同管弦楽団指揮・指導、福岡県立大学教授(名誉教授)、九州公私立大学音楽学会会長(名誉会長)などを務め、2000年、勲三等瑞宝章受章。2000年5月7日死去

小牧 達彦 こまき たつひこ

浜江堂歌独唱。テノール歌手。1997年からベルリンにて研鑽を積む。1998年スタンウェイハウス・ベルリンにてリサイタルを開き好評を博す。これまでに「魔笛」「コシ・ファン・トゥッテ」「カルメン」「椿姫」に出演。2001年には東京芸術劇場にて「21世紀を担う若手歌手による「魔笛」」に出演。現在、混声合唱団「かすが」のヴォーカルトレーナーを務める一方、財団法人アクロス福岡のプロデューサーとして公演の企画・運営に従事、活躍中。

以和為貴

「和を以て貴しと為す」は、聖徳太子の十七条の憲法第一条にある四文字です。油山病院の創立者三野原敏治先生は、かねて仏心篤く、これを座右の銘にしておられました。また病院運営にあたっても、これをモットーとされました。「和」の意味は、一般に、やわらぐ・なごむ・調和するなどの意に解されています。本来の意は、この四文字に続いて、君父にさからうな・さからうことが「和」をこわす、などと書いていますから、この「和」はタテの関係を指しているようです。当時は政権をめぐる骨肉の争いがくりかえされた時代ですから、君臣・父子の秩序を強調したのは当然だったでしょう。

今日、病院運営における「和」は、タテだけでなく、ヨコの関係が重視されています。医師・看護師・コメディカルなどの各職員が、それぞれの立場から意見を述べ、お互いが相手の言葉に耳を傾け、話し合うチーム医療が求められています。お互いに心が通い合うことで職員相互の「和」がえられ、



それはそのまま、和顔愛語の医療として患者さんへ反映されるでしょう。最近、数年前他の病院へ転じた一看護師から聞いた話ですが、「油山病院は、先生や看護師また看護師同士の間で親しみがあつて、何でも話し合えて勤めやすかつたですね。今は、何事も事務的で、温か味がなくて」。私はこれ聞いて、油山病院には「和」の心が生きている、伝統として受けつがれていると嬉しくなりました。病院はあとに続く人が育つてこそ、組織としての将来が期待されます。伝統は一朝にして成るものではなく、常にこの扁額を仰いで日々の研鑽が欠かせません。

筆者は佐藤俊男先生。国立筑紫病院、福岡中央病院の看護学校で倫理・哲学を教えられ、多くの看護師育成に尽くされた方です。福岡市社家町教会の牧師をされること五十年、神学のみならず老荘の学に造詣深く、また能書家でもありました。この書は、病院のため一九九三(平成五)年に書いていただいたものです。

前顧問 安倍光正

あとかぎ

　　涇江堂50周年記念誌を発行するにあたり、私自身も入職5年目となり、この50周年の節目の年に素晴らしい職員の皆様と仕事をご一緒することができて大変光栄であり感謝している次第です。

　　涇江堂は、1749(寛延2)年より260余年、1962(昭和37)年3月20日の法人設立から今日まで50年にわたり時を刻んで歴史を引き継いでまいりました。

　　この自然界の流れのなかで予測できない事象がいろいろな形で発生し、法人の存亡の危機も幾度となく襲って来たことでしょう。

　　この危機を医業一筋に乗り越えての260余年は、職員の創意工夫と英知を結集してのものであり、想像を絶するものです。

　　日本全国を見渡してもこのような歴史を持つ涇江堂は数少ない企業のひとつと言えるのではないのでしょうか。

　　30周年、40周年、そして今回の50周年の記念誌は今後さらなる涇江堂の飛躍の礎となるよう、現在より未来へと発信するものです。

　　基本理念である「和」と「活力」と「信念」をもって、職員の皆様が理事長のもと一方向をめざし、利用者の皆様や地域社会と一体となった取り組みや、よき風土を引き継いで行けば、涇江堂の命名の由来である清らかで絶えることのない悠久たる揚子江の水の流れのように善循環となり、明るい未来が展望され、涇江堂の歴史は永きにわたり引き継がれていくものと確信します。

　　各部署の編集の構成のなかにある数多くの貴重な写真からは時の流れが一目瞭然、当時の匂いが漂い、歴史が蘇ってきます。

　　過去があり、現在があり、明るい未来が見えるようです。この50周年記念誌が職員にとって、新しい目的を見据えた行動指針となり、有効なギアチェンジとなるよう念じています。

　　最後になりますが、50周年記念誌の編集に携われた職員、編集委員の皆様、大変お忙しい業務もあるなかで集中的に纏めていただき、このような立派な記念誌の発行が出来ましたことを心より感謝し、お礼申し上げます。

　　また、祥文社印刷株式会社の皆様には、たび重なる打ち合わせのうえ、全体的なご指導をいただきながらこのような完成度の高い記念誌をご提供いただき、心よりお礼申し上げます。

50周年記念誌編集委員会 委員長

小野 義紘

編集委員会メンバー

委員長 ●小野 義紘
法人本部 次長・人事部長

事務局 ●松本 久美子
法人本部 経営企画室
みんこう堂コミュニティセンター センター長

川上 孝徳
法人本部 教務部長

アドバイザー ●三野原 義光
医療法人涇江堂 理事長

三野原 信二
医療法人涇江堂 副理事長

委員 ●古賀 靖彦
油山病院 副院長

道崎 光義
油山病院 総務部長

北 多恵子
油山病院 看護部長

石谷 直子
油山病院 リハビリテーション部長

野中 彌恵子
油山病院 栄養部長

高田 礼子
油山病院 診療部薬局長

渡邊 房子
介護老人保健施設からざステーション 事務局長

松本 幸代
介護老人保健施設からざステーション 介護部長

由布 康友
法人本部 みんこう堂コミュニティセンター

2013年3月15日 発行

発行者 医療法人涇江堂
理事長 三野原 義光

発行 医療法人涇江堂
〒814-0171 福岡市早良区野芥5丁目6-37
TEL.092-871-2261

印刷 祥文社印刷株式会社

編集制作 バン・パブリシティ株式会社



医療費抑制も止まらぬ

- ・ポストプライム問題以降景気低迷
- ・国家医療のツケは医療従事者と国民へ
- ・嘆いていてもはじまらない⇒アクション！
- ・これまでの固定概念を払拭
- ・新しい斬新な試み
- ・利用者のニーズは変わらない

MINWIN
PRESS
2011

MINWIN
PRESS
2011

medical corporation
MINKODO
1962-2012

50
years

